

やはりレベル5は友達が居ない

レッドレイン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初めまして。レッドレインです。完全処女作な上に皆さんの書いてあるような感じになっちゃうと思います：でも書きたい書いてみたい！ので、暖かい目で見守って頂けると嬉しいです。僕なりに頑張って書いて行きたいと思います!!携帯からの投稿なので更新は不定期ではありますが、頑張りたいと思っています!!よろしくお願いします！

俺ガイルとある魔術の禁書目録のクロスになります。俺ガイルからは比企谷しか出さないつもりではいますが：まあもしかしたら他の方々も出すかもしれません！今回レベル5第6位に八幡を置いた話ですので苦手な方はすいません。八幡の性格めっちゃ変わってると思います。能力のおかげと脳内変換してください(笑)誤字脱字はご容赦ください：

Rタグは一応つけましたが念のためです！

科学の街学園都市。そこでは人口が8割以上が学生の街。その学生の中には能力者と呼ばれる能力を持った学生がおり能力開発のカリキュラムを受けている。しかし能力を持たないレベル0はこの都市でも6割以上を占めており持つ者はたったの4割しかない。さらに能力者において最高ランクであるレベル5はたった7人しか存在しない。その能力者を超能力者と呼ぶ。この物語はそのレベル5になった男比企谷八幡の話である。

目次

始まりと出会い。	1
電撃姫との出会い	5
決別	10
電撃姫との再会	13
妹	26
真実	33
行動開始	37
アイテム	45
闇	52
解放	58
和解	63
不安	67
再会	72
激闘	75
決着	82
わだかまり	87
平穏	92

始まりと出合い。

はてはて。この学園都市に来て1年ちよつとぐら  
いは経ったか。

だいたい1年前俺こと比企谷八幡には能力がある  
事がわかった。

きつかけは些細な事だった。中学生時代イジメられていた  
俺はいい加減頭に来てしまいついキレてしまい頭が真っ白になって  
初めて人を殴ってしまった。

ただ俺が思っていた結末とは大分違っていた。無我夢中で  
殴ったんだけど殴られた相手は10m程吹っ飛んでた。

いやマジで焦ったね。流石に死んだと思ったけど運良く  
重症で済んだ。

え？傷害罪だった？いやまあそうなんだけど実はこれ能  
力の暴走なんだった。いやまあそりゃそうだよな。普通人殴って1  
0mも飛ばないもん。いやね？ボブサップだって無理だからね？

まあそんな理由でイジメてた証拠等も有り俺は犯罪者に  
ならずにするだ。

ただ普通に考えて俺みたいなバケモノそうそう普通に暮  
らせないよな。

いくら相手が悪いとはいえ、カッとなって相手を殴って1  
0mもぶっ飛ばしてたら皆ビビって寄り付かない。まあ元々ボツチ  
だけど：

それを見兼ねた先生とうちの親が一つ提案を出した。  
それが学園都市への移住だった。

同じ能力者も居て何より能力の使い方を学ぶべき俺はすぐ転校の  
手続きをした。

そして中学生3年の夏学園都市の中学へ転校した。  
転校してからイジメも無く静かにボツチライフを過ごし、  
放課後は能力の使い方を覚えた。

そして3年のクリスマスにある事が判明する。

いつも通り研究所で能力開発中能力のテストを行った際レベル5の実力があると結果を受けた。

そのお陰もあって高校は長点上機学園に推薦で入り特別クラスで授業を受ける事になった。

嬉しかった。人を傷つけてしまった能力が世の中の役に立つ。それはある意味自分が存在していいと、俺が必要だと認められたように凄く嬉しかった。

しかもそのクラス俺と1人の計2人のクラスの事。

静かに暮らせるしレベル5だとお金たくさん貰えるしい事しか無いじゃん。

そして高校1年の春現在。

柄にも無く新しい環境にワクワクして向かう。

「ここか。」

特別クラスと表記されてる部屋を見ながら格好つけてつぶやく。ダサ…

教室に入ると席は2つ。そのうちの1つは既に生徒らしき男子が座ってる。なんで表記が曖昧かって？だってこいつ制服着てないんだもん…

特徴は凄いわかりやすい。髪は白くて黒い服着て肌はめちゃくちゃ白い。やばい何こいつ？うさぎ？なんて思ってる…

「え…うさぎ？」

「あア!？」

やっべえ…声に出しちゃった…つかこいつ目赤っ！ビツクリしたわ！

「いやすいません何でもないです。」

とりあえず謝ればいいんだろ？土下座もいとわねえぞこら…だっさ…

「お前レベル5か？」

あれ？何で知ってるのん？

「まあ…」応そうです…はい。」

「そオカ。聞いてた通り目が腐ってンな。」

は？何だこいつ。いきなり失礼な奴だな…俺も人の事言えないや

「お前だつて目めつちや赤いじゃん。充血してるよ？目薬要る？」  
「あア!？」

あ、やつべ。ついやつちつた！テへ。いやキモイな

「ごめんなさい…」

「チツ。なめた野郎だな。」

あれ？こいつ実は結構イジつても大丈夫そうじゃね？  
まあとりあえず自己紹介はしときますか。

「とりあえず。比企谷八幡だよろしく。一応最近第6位になった」

「はッ。別にお前の情報とかいらねエンだよ。くだらねエ事してンじゃねエよ。三下」

「は？お前めつちや失礼だな。三下つてなんだよ」

全く失礼だなこいつ…

「まあいい。俺は一方通行。第1位だ」

こいつなんだかんだ自己紹介すんのな。つか一方通行つてなんだよ。外人？中二病？

…ん？いや待て今こいつ何て言ったの？第1位？マジで？このうさぎが？マジで？

「まっマジかよ…第1位ヒョロ…」

「よオし。そんなに死にてエならスクラップにしてやるよ。」

「ごめんなさい。冗談です。にしても第1位なのか…お前凄いなだな…」

「はア？」

ん？何だ？何かおかしかつたか？

「お前何行つちやつてんの？バカなんですかア？」

「いや、何でだよ。純粹に凄いと思つた俺の心を抉るんじゃねえよ。」  
「レベル5は基本人格破綻者の集まりなんだよ。その第1位だぞ？  
凄いわけねエだろ。俺等は世間から見ればイカれたバケモノなんだよ。」

ああ。レベル5つて頭おかしいの多いのね。そうだよ

な。こいつ喋り方ヤベエし白いし目赤いし。うわあ皆こいつみたいなんだろうなあ。

「お前も色々大変なんだな…」

「いやお前もレベル5だろオが」

「あ…忘れてた…」

「お前。大丈夫か？」

「大丈夫に決まってるだろ。まあここには俺等だけなんだし、お前が人格破綻者でも俺は気にしないぜ。」

「はッ。お前も人格破綻者になるかもシんねエけどな」

「お前よりはマシだろうけどな」

「潰すぞ」

「すいませんでした!!」

うえーん…こいつ顔怖いよお…

ただ何でかこいつとは仲良く出来そう気がする。あ、こい

つもボツチだからかか？

あつ！そうか！レベル5は友達が少ないんだろうなあ!!

まあとりあえずこの新しい環境で人相悪いうさぎと頑張

ろ…

## 電撃姫との出会い

高校1年生の夏。春に出会った学園都市最強の男。一方通行こと白うさぎ（俺命名）。となんだかんだよく話すようになった。あれ？俺友達できてね？あつ…片思いですね。知つてます…なんだよ片思いってキモっ…

さて最近少しその白うさぎが妙なんだよなあ。たまに学校来ないし、来てもなんか怒ってる風だし。全体的に無口になった感じ？いや元々無口じゃんあいつ…ただ近寄りがたい雰囲気があんだよなあ。まあ別に近寄ったりしてないんだけどさ。

そんな事を考えて教室の中に入ると奴は居た。学園都市最強の白うさぎが！

「よお」

「おオ」

あれ？会話終わり？いや俺から話振るとか難易度高すぎだろ…このクラスこいつしか居ないから楽なんだけど最近までは喋ってたから喋らないとマジで気まずいわ…だが俺も成長するんだ。いっちよ最近どうしたのか聞いてみますか！

「なあ」

「ンだよ」

えーん…この人マジ怖いよお…いや八幡頑張れ！お前はやれば出来る子だ！

「お前最近なんかあったのか？」

「なんだよ急に」

「いやあ。まあなんか雰囲気は春と違うね？」

「ああ？いつもこんな感じだろうか？」

「いや、上手く言葉にできねえんだけどよ…なんかあったのか？」

「別に何でもねえよ。だいたいテメエこそ実験とかいいのかよ」

実験？ああ。そういえばあの研究所のおっさんが俺

の能力は原石だとかなんだとかで実験の意味が無いとか言ってたな。

「俺の能力は原石？とかでなんか実験が意味をなさないんだと」



「はッ。さすが三下だなア。」

「いやなんなんだよお前。心配した俺の心抉ぐるの止めてくれませんかね…」

「なア。お前…」

「なんだよ」

「いや…何でもねエ」

ん？なんだこいつ。やっぱり様子がおかしくないか？

「おい。一方通…」

「チツ。時間かア。じゃアな。三下」

「は？え？おい…」

「アア？ンだよ」

「時間って…どこに行くんだよ。さっき来たばかりだろ。」

「お前には関係ねエよ」

そう言いつつ一方通行は、教室を後にした。

「あいつやっぱおかしいよな…なんかあったのかよ。」

ん？いやいや。おかしいだろ。何心配してんだよ。別に友達でも何でもねえし。別に関係ねえし。って誰に言い訳してんだよ…まあいいや。本屋行って帰ろ。

ああ。もうこんな時間だよ。まあ新刊のラノベたくさん買えたしとりあず満足だわ。

にしても一方通行の野郎。なんかあったのかよ。すごい気になる…ああ！ムシヤクシヤする！つたく…人と関わるとマジでロクな事にならねえなあ…ん？

「なあ。嬢ちゃん俺等と遊ぼうぜえ」

うわあ。学園都市にもそうゆうのあんのな。はあ。嫌だ嫌だ。これ見ちやつたら助けるしかないじゃん…

まあ。一方通行のせいで少しイライラしてるし、ちよつと気晴らしと行きますか!!うわあ…恥ずかしい…

「おい！お高く止まってんじゃねえぞ!!」

おっと！流石にやばいな。助けますか。

「あつあのお…」

「ああん？」

あれ…めっちゃ怖くね？…やっぱりやらなきやよかった…

「いや…その人俺のツレなんで…」

「はあ？お前みたいな奴のツレなわけねえじゃん」

ですよね…そりゃこんな美人と俺なんか釣り合わないよね…ん？

「なめてんじやねーぞ」

やばいじゃん。殴られる…だが！フツフツ今の俺は能力者。本当はあんまり人に能力使うの嫌なんだが仕方ない…ここは能力で切り抜けてやるぜ！

「おりや」

右手を挙げて能力を発動させる。

「なっ、なんだこりや」

不良達の影が自分達の体を締め付ける。

「クソ！てめえ何しやがった！」

「あ？企業秘密だよ。早く帰れ。次は本当に潰すぞ」

「ひっ！につ逃げる!!」

どうよ。一方通行バリの脅し文句。あいつもたまには役に立つな。

「で、大丈夫？」

これはあれですね。ラブコメ展開になるやつですね。知ってます。ってんなわけないか。

「何余計な事してんのよ」

あれ？ものすごく予想外なんですけど…お礼とかじゃ無いの？普通。

「えっと…一応助けたつもりなんですけど…」

「私助けてなんて頼んだっけ？」

「いえ…言われてません」

ねえ何最近の子って助けると怒るの？あ、俺目が腐ってるからかな？

「余計な事しないでくれる？あんな奴等私一人でどうとでもなんのよ」

うん。あれだ。面倒だな。謝ってフェイドアウトしよう。ちよつと中二病患ってるのかもしれない。

「そうか。悪かったな。今度は助けなくておくよ。だから早く帰れよ？こんな時間に子供があまり出歩くんじゃないぞ」

ふつ。この気遣いをしながら会話を終わらせるテクニク。完璧だ。さて家帰ってラノベ読も。

「…それが…だ…」

「ん？」

この子今何か言わなかった？

「だ…が…こ…こ…だあ…」

「えっ？」

「誰が子供だあ!!!」

「ええ!？」

何この子いきなり雷放電したんですけどお!!!

「死に去らせえ!!」

えっ!?なんか雷飛んできたんですけどお!?

「ちつ。危ねえ!!」

自分の影を纏ってかみなりを防ぐ。

「あつ危ねえ…死ぬかと思った…」

つたく。能力無かったら黒焦げになんだろ。地面焦げて

るし…

「あつ、あんた…今何して…」

「え？防いだんだけど？」

じゃなかったら普通に危ないし…

「防ぐって…嘘でしょ…あんた一体何者なのよ」

どんだけこいつ自分のスパークに自信あんだよ…まあいいやとりあえず…逃げよう！

「何言ってるんだよ。まったく。まあいいやじゃあな！」

「なっ！待ちなさい！待ってって言ってるんだろゴラア!!」

やばい。めっちゃ走って追いかけてくるんですけど…ここは能力使ってトンヅラするぜ！そう思い自分の影を纏い地面の中に消えていく。

「！消えた…」

「はあ…」

まったく不良よりあの電撃姫の方が疲れたわ…人助けなんてガラにも無い事して疲れてんに追い打ちをかけるように攻撃してきやがって…疲れた…風呂入って寝よ…

「あいつ一体何者なのよ…」

## 決別

昨日の電撃姫は本当疲れた。何が疲れたって助けたのに襲われたことだろう…

もう人と関わるの止めようかな…あつそもそもそんなに関わる人がいないや!…ツラ…

さて夏休み前最後の登校日。

これでようやく長い休みが始まる。

「はあ…夏か…」

そう夏とはいわばリア充の季節。どいつもこいつもイチャコラしやがって…リア充は死ぬ!!おっとついいつものクールな俺がイラついてしまった。

ところで、話は変わるが俺や一方通行の居るこの特別教室だが、基本的に学生が行う授業は一切行わない。テストはちやんとあるけど…

俺達は自分達の能力がとれほど科学的に使えるかを実験したり研究したりを先生と行う。

だが俺の場合原石と呼ばれる能力のため、自分の能力がいかに科学で役立つかがわからない。

そのため基本的には教室で本読んでもか先生の話を聞くかのどちらかしか行わない。

梅雨明けまでは俺の能力が気になった一方通行がちよいちよい話かけてきたが、夏に入ってから一切会話が無くなった。

あいつ…また最近来なくなったな…べつ別に寂しくないんだからねっ!…誰に言い訳してんだよ…

今思えば、あいつ一方通行はなんだかんだいい奴だと思う。ぶつきらぼうで愛想と人相が悪くても根は真面目だから聞いた事にはしっかり反応するしなんだかんだしつかり話してもくれる。

だからなのかもしれない。こんな俺と偶然とはいえ関わりを持つてくれたあの白うさぎとなら仲良くなれるかもしれない。似た雰囲気あつたしな!今全然無いけど…

そう思った時教室の扉が開いた。

「よオ」

「一方通行…お前…」

最後まで顔出すつもりだったのか。

さてそろそろここ最近のお前の雰囲気怖かった理由そろそろ聞かせてもらおうぞ。

「はッ。相変わらずお前死んだ魚みたい目してやがるなア」

「目の充血してるお前に言われたくねえよ。そんな事より一方通行聞きたい事がある」

「あア？」

「お前本当に夏に何があった？明らかに様子がおかしいぞ」

「何度も言わせんな。テメエには関係の無い事だ」

「お前なあ…俺は心配して…」

「俺がお前に心配してくれて頼んだかよ？」

「そういう事じゃねえだろ…俺はただ…」

「ただ何だよ？俺にとつてお前はただのクラスメイトだそれ以上でもそれ以外でもねエンだよ」

「！」

「テメエが俺の邪魔すんならここで捻り潰すぞ」

「こいつ…本気で背筋が凍る。背中に嫌な汗を掻く…これが本当の殺気…」

「お前本気かよ…」

「あア。今更一人二人殺つても変わらねエンだよ!!」

一方通行が叫んだ瞬間教室の床にヒビが入る。それと同時に自分が死ぬ想像をしてしまう。怖い…殺される前つてこんな感じなのかよ…

「オイオイ。なんだなんだよなんなんですかア??ビビッてシヨンベンチビリそうってかア？」

「何だよその無駄な三段活用。チビリそうに決まってるだろ。バカかよ」

やべえ。怖いけどつい条件反射で挑発しちゃった…どうしよう…

やばい感じじゃん…

「ああそう。じゃ死ねよ。」

ああ。死んだなと思った瞬間…

一方通行の携帯が鳴り出した。

「チツ。今日はこれで勘弁してやる。だがなア二度と俺に関わるな」

そう言い残し一方通行は歩いて去っていった。

一人土手で考える。あれが一方通行の殺意。まじで死ぬかと思っ  
たし怖かった。あいつ人を何人か殺ってるみたいない方してたな  
：

あいつが人殺し？確かに人相も悪く悪人面をしてはいるが根本的  
に真面目なあいつが人を殺すとはどうしても考えられなかった。

「見つけたわよ！あんだ！」

その声の主は昨日の電撃姫だった。

## 電撃姫との再会

「ようやく見つけたわよ!!」

「何だ昨日の電撃姫か…」

「電撃姫って何よ」

「昨日お前がいきなり放電したうえにスパークしてきただろ。あだ名だよ」

テンション低い時にこいつ何で絡んでくんだよ…あ、元々こんな感じだったな…

「あんたテンション低いわね。目も死んだ魚みたいだし…大丈夫?」

こいつ…ほぼ初対面かつ昨日助けた恩も忘れていきなりデイスつてきやがったよ。何?最近の子供はいちいち人をデイスらないと死ぬの?

「テンションは元来こんな感じなんだよ。目はほっとけ」

「あつそ。そんな事より私と勝負しなさい!!」

「は?」



え、何？勝負って…この子頭にババロアか何か詰まってんの？バカなの??

「はっ…じゃないわよ。いいから勝負しなさい。あんたの能力見せて貰うわよ!!」

うわあ…この子バカだ…ちよつともう本当に関わらないで欲しい。

「いや…あのすいません忙しいんで…」

「嘘をつきなさい！あんたこの土手で寝っ転がってたじゃない！」

「お、おい」

電撃姫のスパーク攻撃！ひええん…もう色んな人に攻撃されすぎ…今日は厄日だよ…

「さあ！勝負よ!!」

「どんだけバトル好きなんだよ…生憎俺はバトルモノは嫌いなんだよ」

「誰が漫画やアニメの話したのよ。いいから勝負なさい!!」

これあれだな…やらないと帰らして貰えないかもしれん…あんま

り人に、ましてや女の子に能力使いたくないんだよな…昔のトラウマが…

よし全力で手加減しよう!!

「じゃあわかった。相手になるよ…」

「よし…じゃあ行くわよ!!」

うっわ…イキイキしてるよこの子…

電撃姫は放電しながら昨日のように雷をこちらに飛ばしてくる。それを上手く避けながら遠すぎず近すぎずの距離を保つ。こちらから攻撃をするつもりは一切無い。

しかしお気に召さないのか雷を撃ち込む数が少しずつ増える。これ…全部避けないと普通に死ぬな…

「ちよつとー真面目にやんなさいよ!!」

どうやら電撃姫は攻撃しない俺のやり方に酷くご立腹のご様子…嫌になるなあ…

「真面目に避けてるだろ」

「あんたも攻撃しろって言うてるのよ！」

「攻撃って…お前な…基本紳士である俺が女の子に、ましてや子供相手に手を挙げるわけないだろ…」

「だ…が」

ん？あれ？この感じ…昨日の…

「誰が子供だあ!!」

あちゃー。この子に子供ってタブーなのね…言葉のチョイス失敗したあ…

電撃姫はキレながら黒い砂嵐のようなものから黒い刀を取り出す。あれ…電撃と砂って事は砂鉄かな？磁力でまとめる感じね。

いやいやいくら俺が弱いからって砂鉄なんかじゃ死なな…

そう思っていると彼女の刀が草を切り裂いていく。

あれ？あれ殺傷ランクめっちゃ高くね？彼女の周りの草刈られたよ？あ、当たったら普通に死ぬ…

「ま、待て！それは反則だろ！」

「勝負に反則なんて無いのよ！勝てばいいのよ勝てば！」

どこのジャギ様だよ…この子なら世紀末でも生きていけそうだな。

なんて事を考えていると電撃姫は砂鉄の刀を持ちながら突っ込ん  
でくる。

仕方がないよな…。流石に能力使わないと危ないし…

彼女が近くに来た所で彼女の影から影のような手が砂鉄の刀を  
持った右腕と両足を掴む。

「なっ!?!」

さて。問題です。子供でもわかる単純な問題。

走ってる所に両足を急に掴まれたらどうなる？

はい。正解。転けますね。

しかも右腕も動けなくしてます。

とゆう事は顔から行きますよね…ヤベエ手を動けなくするのは失敗だったかな…

「なあ。大丈夫か？」

コケてたからピクリともしない彼女を心配して近づく。転ばせたの俺だけど…

「悪い。手を動けなくさせたのはミスった」

電撃姫は少しずつ立ち上がり顔に土を付けながら顔を真っ赤にして下を向いている。

ああ…恥ずかしいよね。コケるってなかなか人に見られたくない…よくわかるよ…

「…せ」

「え？なんだって？」

別に俺は金髪の某主人公のように難聴系主人公では無い。何か言ってるのだが本当に聞こえないのだ。

「…さ…せ」

「??」

恥ずかしくて声出せないのかな？まあ恥ずかしい時ってあんまり声だした…

「死にさらせえ!!!」

「うお!!」

電撃姫の怒号により周囲へ雷が分散する。

「はあはあ」

マジビビった。死ぬかと思った…

「わっ、悪かったよ。悪気は無いんだよ」

「あつたら最低よ!!」

顔真っ赤にしながら電撃姫はキレております。

ていうかそもそも勝負吹っ掛けて来たのそっちだろ…

「悪かったよ」

「そもそもあんた一体何をしたのよ!」

「いや転ばせようとしたただけだって！ 恥ずかしい思いさせようとか全く考えてないからね？」

実際あんなに恥ずかしくて怒るのは予想外だったし…

「そういう事じゃない！ 一歩も動いてないのにどうやって転ばせたのよ！」

ああ、そっちね。能力的なあれね。説明すんのかかったるいなあ…

「まああれだよ。俺影を操る能力持つてるからそれでだよ」

「影？」

あれ？ そんな不思議そうな顔してどうしたの？

「影だ」



「嘘着くんじゃ無いわよ！そんなの聞いた事無いわよ」

え？影使う能力者居ないの？学園都市。

あ、そつかそつか！俺原石だから居なくて当然か！全く八幡のうっかりさん！…キツいな…

「いや本当だ。」

「ありえないわ！」

「ありえない？何で？」

「何で影が人の足を持てるのよ。だいたい演算はどうやってるのよ！」

「演算？」

「は？」

「え？」

あつれえ？何か間違った事言った？今

「あんた演算無しでどうやって能力使ってるのよ」

「いや…なんとなく…?…?…こう雰囲気的に?」

「は?」

「え?」

あれ?…さつきもこの流れじゃなかった?…デジャヴ?

「てきとうな事言って誤魔化せるわけないでしょ!あんた何者よ!!」

「比企谷八幡です」

「聞いて無いわよ!!!」

「じゃあどうすればいいんだよ…」

もうこの子情緒不安定なんじゃないの…？勘弁してくれ。いい加減逃げよう…

「だからあんたの能力を…」

「まあいいや。帰るわ。ちゃんと勝負したし満足だろ？そろそろ子供は帰りなさい。門限が…」

あ…やつちった…

「誰が子供だあ！このゾンビ野郎!!」

ああ…めんどくさい！逃げろ！

「逃げんな！待てゴラア!!」

めっちゃ追いかけてくる…誰か助けてくれえ…

妹

夏休み…

イラつく。何がイラつくってリア充だよ。

こいつらどこ行っても「キャハッ♡」「ウフ♡」みたいにしゃがって…爆ぜろ！

あれ…？爆ぜろってかっこよくね？今度能力使う時使ってみよう…いやスベるな。しかも使うタイミングなんて無いし…

夏休みなのにも関わらず俺が外に出る理由は簡単だ。

エアコン壊れた…

死ぬわ！今日も平均35℃って…温暖化半端ねえな。こりやもうダメだ。学園都市何か作らねえで温暖化なんとかしろよ。

いや何かは流石に言い過ぎか…。実際住んでるしな。

さてリア充という俺にとって一方通行や電撃姫より強敵の包囲網を潜り抜けた俺は第7学区の家電量販店にやってまいりました。

エアコン無いとか死ぬし買うしかない。一人暮らしも楽じゃねえぜ…

エアコンコーナーへ行くとあの電撃姫が居た。

うわあ…どうしよう…会いたくない。でもエアコン欲しいし…

そんな事を考えていると電撃姫がこちらを振り向き近づいてくる。

あちや…仕方ない。謝って解放されよう。行くぜ！

「あつ、ぐめ…」

「何を先ほどからジロジロこちらを見てるのですか？とミサカ9982号は自分の貞操に危機感を覚えつつゾンビの目を持つてるあなたに話しかけます」

「は…え？」

「何か？とミサカ9982号は早く質問に答えてくれと答えを急かしつつ質問を投げかけます」

あつれえ？おかしいぞお？

口調もおかしいし、その番号と号って何？量産でもしてんの？つか

一番おかしいのは…

：何そのダサイゴoogle。えっ流行ってんの？3本ライン流行ってんの？

「お前電撃娘だよな？」

「はあ。確かにミサカの能力は電撃使いですが。それが何か？とミサカ9982号はゾンビの目で見つめる貴方に危機感を覚えながら答えます。」

いやいや…何この子。口悪っ…しかも目の事凄いい言ってくるんですけど…

「いや確かに俺の目は腐ってるけど言い過ぎだろ…」

「すみません。貴方はイジっても大丈夫だと思っていました。とミサカ9982号は密かに舐められやすい貴方を心配してみます。」

ええ…もう嫌だ…最近女の子にバカにされすぎじゃない？俺が何したんだよ…

それにしても…

「お前電撃姫と姉妹？」

「電撃姫とはお姉様のことですか？とミサカ9982号は確認作業を行います」

あああいつお姉ちゃんなのか。そういえばあいつの名前聞いてなかったな。

「それにしてもよく似てんな。双子か？」

「まあそのような所です。とミサカ9982号は面倒なので肯定しときます」

お前から話しかけてきたんだろうが…

「なあその喋り方疲れないのか？」

「いえまったく。とミサカ9982号は気にするなゾンビと心の中で密かに思っています」

「密かでも何でも無いからね？全然言っちゃってるからね？」

こいつ…絶対ワザとだろ…いい加減泣くよ？

「これは失礼しました。とミサカ9982号は心にも無い事を言います」

うん…もうイジられるのは回避できそうにないや！

「じゃあ言うなよ…それしてもお前何か買いに来たんじゃないの？」

「いえ。ミサカはただの社会見学しに来ただけです。とミサカ9982号は貴方の質問を訂正します」

なんだよ社会見学って…家電量販店でする事じゃないだろ…

「まあいいや。俺はエアコンを買いに来たんでな。じゃあな…」

「待ちなさい。ミサカを一人にする気ですか？とミサカ9982号はここを案内しろと密かに伝えます」

「だから密かにとかじゃないからね？もう案内しろって言えばいいだろ…。ただ悪いな俺はこの後あれだから暇じゃ無いんだよ」

嘘だけど。もうエアコン買ったらすぐ帰りたいし、面倒だからやりわり断ろう。

「嘘ですね。とミサカ9982号は雰囲気からして予定など皆無そうだと断言します」

わああ。初対面の人にボツチってバレた！俺ってそんなぼっち感出てるのかよ…

「嘘じゃねえよ…ったくめっちゃ失礼だな…」

「いえ断言できます。とミサカ9982号は…」

「あつ！あんた!!」

ん？聞き覚えのある声だな？

そう思い振り返ると…まあ奇遇ですね！麗しの電撃姫が怒りながら立っていらしてましたわ！…最悪だあ…

「おつおう…久しぶりだな…」

「久しぶりじゃ無いわよ！あんたいつもいつも人の顔見ては逃げ出して一体何のつもりよ！」

いやそりや逃げるだろ…お前会う度に勝負吹っ掛けるし俺の行く先々で会うし…恐ええよ…

「そりや勝負吹っ掛けられたら逃げるだろ普通…」

「?あんた誰とい…」

ん?…なんだ?…どうしたんだよ。

「おい?…どうした?…」

「何であんたがここに居るのよ…あの噂は本当に…」

「初めましてお姉様。とミサカ9982号はお姉様に挨拶を申し上げます」

は?…初めて会うの?姉妹じゃねえの?あれか…生き別れてきな?お姉様に会いに来たてきな?やべえ…そう考えるとこの子めっちゃいい子や…

「良かったな。お姉様に会えて」

「いえ別に良かったという程のものではありません。とミサカ9982号は貴方の考えを否定します」

あつれえ?おつかしいぞお?…二度目のコナン君出るぐらいおかしい。どうゆう事なんだ?ちよつと意味がわからないですnee?

「それより貴方いつになったら案内してくれるのですか?とミサカ9982号は早くしろと心の中でひっそりと思います」

「言い方変えても無駄だから。キツイ事言つての全然変わってないからね?…まあいいか。つかお前のお姉様に案内してもらえよ…」

つつてもその当の本人なんか放心してるけど…

「あんたどうしてここに…それよりあんたの目的は何!?!」

「では確認作業に移ります。とミサカはパスワードの要求を行います」

「パスワード?…なんだそりや」

「知らないわよ…」

「それでしたらお教え出来ません。とミサカ9982号は質問に答えられないと申し上げます」

いやその前にお教え出来ないって言ってるじゃん…変わった奴も居るもんだな…あつ俺も変わってんな。

「んで?お前は何でここに?…」



「私はゲコタの缶バッチが欲しくてそれで…」

「何だそれ？つか何で缶バッチ？アイドルか何かなのか？」

「違うわよ！あっそうだ！これをこうして…うむうむこれはこれだなかなか似合うじゃない？鏡で見るとより客観的ね」

うっわ…何あのカエルいやいやあれはねえだろ…酷すぎる…

「いやいやねえだろ。とミサカ9982号はお姉様の子供趣味にドン引きします」

「なっ！いいでしょ！別に！もう…」

呆れた顔で妹から缶バッジを取ろうとすると妹の反撃！諦めない姉。阻止する妹。何だかんだ仲よさそうな姉妹じゃねえか。

「何すんのよ!?!」

「これはもうミサカの物です。」

「はあ？何言ってるのそれは私の…」

「初めて…初めてお姉様がミサカにくれた物ですから…」

「あなた…仕方ないわね。それあげるわ。大事にきなさい？」

ほう。いいお姉ちゃんだな。

「くれるならもう少しマシなのを寄越せよ。とミサカ9982号はお姉様のお子様趣味再度ゲンナリします」

「やっぱ返せえ!!」

仲良いんだか悪いんだか…本当に微笑ましな。

「そんな事よりミサカあれが食べたいです。と貴方に奢れと要求します」

「は？ああアイスね。別にいいけどよ…」

「なんと！貴方目は死んでいますが良い人だったんですね！とミサカ9982号は驚愕を露わにします」

「もう突っ込むの面倒くせえ…まあいい。どれにすんだよ。電撃娘もいるか？」

「あんたねえ。私にはちゃんと御坂美琴って名前があんのよ!!」

あつ御坂って苗字なのか妹の名前がミサカなのかと思った…いや冷静に考えれば普通苗字だよな…

「じゃあ御坂（姉）もなんかいるか？」

「何のよその（姉）って…」

「どっちも御坂だから区別するためだよ」

「お姉様早くしてください。とミサカ9982号は待ちきれないと急かします」

「じゃあ私はこれで」

「ミサカはこれでお願ひします」

「はいよ」

つかれた…あの後アイス食って猫と戯れたり御坂妹に姉と街案内したりと疲れた…おかしい…今日の予定はこんなじゃなかったはずだ…

「ではミサカそろそろ時間ですので。とミサカ9982号はそろそろ行く事を伝えます」

「おう。んじゃ俺も帰る」

「気おつけて帰んなさいよ？この街は危ないの多いからね」

お前とかな…

「何か言ったかしら？」

「いえ…何も…」

何で心読めんだよ…読心術まで持ってんのかよ…

「それではお二人ともさようなら。とミサカ9982号は別れの挨拶を告げます」

「おう。じゃあな」

ふう。疲れた…女の子ってなんであんな元気なんだよ…俺が元気無いだけか…

なんて事を考えながら帰路についてると物凄い音と青いスパークが見えた。あっちは確か貨物車とかある場所だよな。暇だしちよつと見てみるか。

普段は気にもしないのに何故か今日だけはどうしても気になって

仕方なかった。

## 真実

何故だろう。変な胸騒ぎがする。

さつき御坂妹と別れた時も感じた、この妙な感覚。

「はあはあ」

普段運動しない体力の無いボツチにとって全速力でマラソンとか普通にしんどい…脇腹めっちゃ痛てえ。

「確かここだよな…」

青いスパーク。そして爆発音。

俺はどっかのイマジンウニ頭みたいに鈍感系じゃない。あれは間違いない。電撃姫こと御坂姉だ。あいつがこちらで能力をぶっ飛ばしたんだろ。

ただ何故だが変な気持ちになる。ただの喧嘩であれだけの爆発音がなるだろうか…

レベル5と説明はしていないものの俺との勝負というなのイジメを仕掛けた時だってあんな音はしなかった。

つまり今回御坂の相手はレベル5であり、俺より強い相手…。その相手を想像したく無かったがあいつかもしれない。

なんとなくそう感じてしまう。

「居た！」

膝を着いた御坂を見つけた。良かった無事だな。

下を向いてて表情は分からないが怪我等は無さそうだな…

「おい御坂。無事か？今回は派手にやったな…つたく誰とけん…は…？」

「こんばんは。先ほどのはどうも。とミサカ10032号は丁寧に挨拶します。」

ああ。そうだ。御坂妹とは今日確かに会った。だが違う。さつきまで会ってた御坂妹ではない。確信出来る。番号が違う？そんな事じゃない。

だって…

「お前…どういう事だ…なんだよこれ…」

「どうかされましたか？とミサカ10058号は貴方に質問を投げかけます。」

「何で御坂妹がこんなにくさん居るんだよ…」

目の前には信じられない光景が広がる。ミサカ妹と全く同じ格好した女の子が何十人と居るのだ。

同じダサイ-googleを付けて、姉と同じ制服を来た、姉と全く同じ顔の子が何十人も自分の前に立っている。

「どうゆう事だよ…何で…」

「見られたからには話すしかありませんね。とミサカ10031号はこの実験について話し始めます。」

驚愕の内容だった。

量産能力者計画と呼ばれる計画はレベル5の第3位御坂美琴のDNAマップを使いレベル5を大量に生み出す計画を行っていた。

しかし結果は失敗。クローンの能力は御坂美琴に到底及ばず、良くてレベル3程度。計画は失敗で終わった。

しかし、同時期に一方通行の絶対能力進化（レベル6シフト）計画が立てられており、樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）の演算によって出された計算式は、レベル5の電撃使い 超電磁砲 御坂美琴を128回一方通行が殺害すればレベル6になると答えが出た。

しかし御坂美琴のみを128回も殺すなど不可能。そこで研究者達が目を着けたのが量産能力者計画のクローン御坂達だ。レベル3程度とはいえ御坂美琴にはある意味違いない。

再演算の結果はクローン体の2万回の殺害だった。

利用するしか無いと研究者達は再度クローンの製造を始め一方通行の絶対能力進化計画に段取りを変更した。

そして…

研究者達は…いや一方通行は実験を開始した。

さきほど会っていた9982号は今しがた一方通行に殺害された。

その現場を見た御坂が無謀にも学園都市最強に挑むが呆気なく敗北をし今に至る。

御坂妹が何十人も居たのは実験の後始末や証拠を残さない為のこと。

そしてこの実験の開始時期と一方通行の様子がおかしくなり始めた頃は一致する。

間違いない。あいつこの実験のせいで今みたいになったんだろうな。

外れて欲しかった予感はいっかり当たった。最悪の気分だ…

だが今は…

「御坂帰ろう。送るぞ」

返事はしないもののフラフラ立ち上がりゆっくり歩く。

「ここに居ろ」

少し歩き公園を見つけたので御坂をベンチに座らせ飲み物を買っていく。

正直御坂に気を使ってやれる程の余裕は無い。だがこうでもしかいと自分が可笑しくなりそうで、気が狂いそうだ。

殺人や犯罪とは無縁だった。そんな環境下で過ごした事は1度もない。

全くの他人が被害者なら同情程度で済むが。そうではない。

1時間前に遊んでた子が、自分のクラスメイトが関与している。

いやもつと言えば中心人物と言ってもいい。俺の知り合いがこの非人道的実験の渦中のだ真ん中にいる。

頭の中でグチャグチャ考えながら御坂に飲み物を渡す。

「ほら」

「ねえ」

「何だよ」

「聞いたんでしょ。実験の事」

「ああ」

こいつは聞いたうえで一方通行に負けた。たぶん圧倒的な力に…そりゃ絶望的だよな。

「どう思った？一方通行はね。楽しそうに実験してたよ？あの子達があんな辛そうな顔してたのに…笑って殺したの」

「なんとなく想像がつくな」

「は？」

「俺は一方通行と同じ学校の同じクラスの人間だ」

「あつ、あんた!!あんたまであの子達は死んで当然とか言うんでしょ  
うね!!」

「落ち着け」

「落ち着いていられるか!早く止めないとあの子達が…あの子達があ  
…」

「わかってる」

泣いてる御坂を宥めながら決意する。

ああ。んな事わかってんだよ。

御坂がどんだけ優しい子なのかも。

御坂妹がどんな奴なのかも。

たぶんだが一方通行の本心も…

御坂も御坂妹も誰も死んじやいけない。

一方通行も誰も殺してはいけない。

だからこそ…

「御坂。力を貸せ。実験潰すぞ」

## 行動開始

「潰すってどうやって!? 相手はあの一方通行よ!? レベル5の私で勝てないのにあんたが勝てるわけないじゃない!」

まあそれが普通だよな。俺レベル5って言ってるし。

「いや。一方通行とは出来れば戦いたくない」

「は?」

ですよ。いやふざけてるわけじゃないからね?

「実験自体出来なくすればいい。例えば研究所が破壊されたりして実験自体の継続を困難にすれば一方通行とは戦わず、実験を終了に追い込める。」

「じゃあ研究所を潰すって事?」

「ああ」

たぶんこの作戦以外に計画を止める事は無理だ。仮にこの方法が失敗したら後は玉砕覚悟で一方通行と戦って止めるしか無いがそれはほぼ不可能に近い。上手く行ってくれないと、最悪俺と御坂は死ぬ…

「ならそれは私1人でやる」

「は? 何でだよ」

「あなたには関係の無い話だからよ。これは私の問題。私一人でカタをつける」

またそれか…

『テメエには関係のねエ話しだ』

ったく。イラつく話だ。

「ああ。俺には関係無いな。だがお前の意見は聞かない」

「はあ? なんでよ! これは私のせいなの! 私がDNAマップを渡したりしなかったらこんなことには…」

「だろうな」

「だったら…!」

「だからなんだ? お前がどう言おうと関係ねえんだよ。決めたからな」



「何を言って…」

「お前も御坂妹も必ず守るってな」

「!!」

「だから一人で無茶すんな。俺等で助けるぞ。お前の妹」

「…う…ん…」

うわあ…やっちゃまった…めつちや恥ずかしいし、傍から見ると女の子泣かしてる人じゃん…よかった朝方で…

「まあなんだ…泣くなよ…」

「なっ、泣いてないわよ!!」

あー。はいはい。恥ずかしいよね。顔真っ赤だもんな。

「あつそ。まあとりあえず…その…今日の昼空いてるか?」

うっわ! めつちや恥ずかしい。予定聞いた事あんま無いからすげえ恥ずかしい…

「えっ…? ええ…」

「いや…今後の打ち合わせとかしたくてな」

「あつ! そつそう言う事ね! え…ええ大丈夫よ!」

あ。これ絶対『は? 何こいつ? かつこつたセリフ並べたうえに昼の予定聞いてんの? 何? 惚れたとか勘違いしたの? いやいや…ないだろ。これだからDTは…気分悪っ!』

てきな事絶対思ってたよ…はあ…辛っ…

「じゃどとりあえず一旦帰ろう。12時にセブンスミストでどうだ」

「ええ。大丈夫よ」

「んじや後でな」

「ええ。遅刻するんじやないわよ!」

「ああ」

まあ、取り敢えずは元気になって何よりだ。さて…流石に一度帰るか…ん? あ! エアコン買うの忘れた…

やばい…かなりまずい。何がって? 寝坊した。現在昼の1時を過ぎております…

『遅刻するんじゃないわよ!』

やべえ。殺される…

準備しダツシユでセブンスミスト入り口に行く。居ました居ましたよ…大層ご立腹の様子で待つておられました。

「遅い…!」

ひええ…怖いよお…あいつ今なら一方通行に勝てるんじゃないやねえの?

「あ…あのお…」

「あら…随分と遅い到着ね」

「はい…すみません…言い訳の仕様もございません…」

「全く何で私が2時間も待たなきゃいけないのよ…」

えっ? 2時間? こいつ11時から居るの?

「お前11時から居たのか。本当に悪かったな。飯でも奢るぞ」

「なっ! 別にたまたまなんだからね!」

えっ何でツンデレ? あっデレてないからツン? いつもじゃん

…

「おっおう。とりあえずどこか喫茶店でも入るか」

「そうね。あまりふざけてる時間とか無いし」

そうだ。俺達はあの非人道的な実験を止めるために集まってるんだもん。遅刻なんてしてんじゃないやねえよ俺!

気合いを入れ直したところで俺たちは御坂の行きつけである第7学区のファミレスに入った。

「あのよう」

「何かしら? 私アイステイーね。あんたは?」

「マックスコーヒー」

「あるわけないでしょ…。コーヒーをお願いします」

「かしこまりました」

店員が居なくなった所で再確認しようか。

「なあ。今後の方針を決めるために集まったんじゃないやねえの?」

「ええそうよ」

「ならファミレスはねえだろ…」

俺達は今後犯罪を犯す。そりやそうだ。いくら危ない実験をやつてるから止める。と言う大義名分があつても、施設やらデータやらをぶっ壊すつもりでいるのだから。それなのに…

「お前もうちよい場所考えろよ。いくら何でもここは…」

そもそもぼっちの俺からした女の子と2人でファミレスとか難易度高すぎ…

「大丈夫。むしろうるさい所の方が声とか考えなくていいしね!」

何効果音に『キラッ!』とか出そうなウインクしてんだよ。可愛すぎて告白して振られちゃうだろうが。振られるのかよ…

「ああそう…まあいい。とりあえず戦力の確認だが、話してなかったから話すが俺は一応レベル5だ」

「は? 誰が?」

「だから俺が」

「はああああ!!?!?」

「おい!声デケ!エよ」

ビックリしたあ…俺がレベル5なのそんなに意外ですかね…いや客観的にみて意外だな。

「嘘でしょ…序列は!」

「本当だよ。第6位。つってもなつたのは半年ぐらい前だけど」

「居たんだ幻の第6位…誰も知らないレベル5…」

何その幻の6人目みたいなの。ミスディレクションとかできねえから。あつ似たような事出来る能力だからあながち間違いでもねえや!

「まあなつたばっかだし、原石だからどうやら研究結果とかも発表無いしな」

「じゃあ、あんたの能力だけど改めて何なの? 影とかって言つてたけど」

「能力名は影使い(シャドウマスター)。名前の通り、影を使う能力だ。基本は色んな影を使って攻撃をしたりする。例えばお前を前回転ばせた時や、不良達の身体を縛り上げたのはお前達の影を使った。他に

も街灯がある場所で影があればその影を使って色々出来る。もちろんいくつか制約はあるが、さして問題でも無い」

「あつ、あんた無茶苦茶ね…」

「防衛方面では物理攻撃が基本無効だ。それはお前の能力も例外じゃない。ただこれは俺が自分の影を纏えたらの話だ。例えば光が一切無く影が存在しないとか俺が空中に居たりして影が無い場合や俺の影が俺以外に踏まれたりすると影を纏えない。雷や炎。殴ったり蹴ったりなども無効化出来るが、俺が強風とかに飛ばされたりすると纏えないため能力が使えない」

「あんたいくら何でもチートよ…そんなのどうやっても勝てないじゃない…一方通行だって…」

「いや一方通行にはたぶん効かない。あいつは俺の能力をある程度は知ってるからな」

「何で知ってるのよ…あつ!」

「ああ。俺はあいつとはクラスメイトでな。あいつが実験を開始するまでは割と会話してたんだ」

「そう…」

ダメだな。一方通行の話は禁句だな。

「まあいい。話を戻すぞ。俺が自分自身で一番厄介だと思える能力は認識操作だ」

「どういう事?」

「俺が誰かに追いかけてられる状態で自分の影の一部を纏って自分の影に隠れる。代わりに自分の偽物を相手の影で作る。相手には俺が走つてようにしか見えないが俺自身はそこには居ないって事だ」

「じゃああんたが度々急に居なくなるのって…」

「ああ。自分の影纏って自分の影に隠れてた。他にも自分の影を使つて俺という認識を一時的に意識せらせた事も出来るが、一対一だあまり意味が無い。例外はあるが基本俺自身を集中して認識されると能力に意味をなさない。そのために、相手の影を使って俺と相手以外のもう一人を認識させて、能力発動。みたいなことは出来る」

「あんたためちやめちや強いのね…いや多分だけど話を聞く限り一方通

行と同等レベルなんじゃないの?」

「どうだろうな…そもそも戦いつて物をするような環境に居なかったから実際本当の戦いで使えるかどうか微妙な所だな」

「ただ話しを聞くとかなり使えるわね」

「ああ。俺が先に研究所に潜りこんだりできるからな。1人分なら影と同化して相手の認識を外らせる事も出来るしな。長くはもたねけど」

「充分よ。まず私が研究所のデータベースにハッキングしてデータのコピーを取るわ」

「頼む。ついで見取り図なんかも取つといてくれ。お前は携帯で指示を出して欲しい。研究所は俺一人で行く」

「待って! 私も…」

「分かってる。ただなんかあつた時にバックアップしてくれる奴が必要だろ。それに俺の能力はある意味こういう時に力を発揮すんだからよ」

あつ。やっべ…ついお兄ちゃんスキル発動して頭撫でちつた…こつ殺される…

「うっ…うん…」

あれ? 予想外だな…あれか? キモすぎて言葉も無いってか。どうしよう泣ける。

「お姉様…?」

「ん?」

「あ?」

お姉様と呼ぶ奴に心当たりがるが声が全然違うな…

「黒子!」

「お姉様。その類人猿は誰ですか?」

「あれえ? 御坂さんデートですかあ?」

「佐天さん! いきなり失礼ですよ!」

いきなり3人の女の子が御坂に話かける。うわありア充だあ…気まづい…

「いやこれは…そうあれよ! 友達よ友達!」

えっ俺等友達だったの？どうしよう…感激する…お父さん、お母さん、そして愛する妹よ…お兄ちゃん友達出来たよ！いや出来て無いです。嘘です。すいません。

「友達なのにどうしてお姉様の頭を気安く触ってるんですの？」  
「やっべ。忘れてた。つてかこいつ怖いな！」

「ははあん…御坂さん今日デートだから今日来れなかったんですね??」

「まあ！ お姉様そんな奴とデートとは!! なりません！ 黒子は認めません!!」

なんだよデートつて…意味わかんねえよ…

「ちつ違うから！ これは全然そんなんじゃないから！」

「御坂さん可愛い♡！」

「佐天さん！」

「佐天さん。趣味が悪いですよ…御坂さんすいません。お邪魔してしまつて」

「初春！ これはすぐ邪魔するべきですわ!!」

この初春つて子なんで頭に花束乗ってんの？生えてんの？それ。

「ほら！ あんた行くわよ！」

「は？ どこへ？」

「いいから！ じゃ。皆またね！」

「あっ！ お姉様まだ話しは終わってませんわよ！お姉さまあ!!!!」

あのツインテールうっさ…まだぎやあぎやあ言ってるよ…こいつの妹かなんかなのか？随分似てないな。

「はあ。ここまで来れば大丈夫ね…」

「なあ。あいつらしいのか？」

「いいのよ。この件にあの子達は絶対巻き込まない」

「そうだな。よし。とりあえず方針は決まったないつ実行するか」

「今日がいいわ。出来るだけ早く実験を止めたい」

「だな。よし。じゃあ夜に落ち合おう。場所はどうする？」

「まず学園都市のコンピューターベースにハッキングしてみるわ。場

所がわかったら連絡するから連絡先教えて」

「わかった」

「凄いだろ…家族以外の連絡先を、しかも女の子の連絡先をいゲットしたぜ！つっても目的が違うんだけどな…」

「じゃあまた夜連絡するわ」

「ああ。よろしく頼む」

そして実行する夜になった。御坂から10学区のホテルに来て欲しいと言われた時は少しドキドキもしたが、別に着替えた御坂が座ってただけだった。

「お前私服持ってるんだな」

「買ったのよさつき。さすがに制服じゃまずいでしょ。それよりいくつかあるけどどうするの？」

「しらみ潰しで行くしかないな。1日4箇所ぐらい行けば3日ぐらい終わるだろ」

「そうね。行きましようか。着いてきて」

「ああ」

「ここがその研究所か…思ってた通り…白いな。本当なんで研究所の建物って白いんだろうな。」

「あそこよ」

「みたいだな。よし。俺が先行する。道案内とバックアップ頼むぞ」  
「了解」

行くぜ。ミッション開始だ。恥ずかしいから二度と言わね。

## アイテム

「そこを左よ」

「了解」

無事に研究所に侵入し、データベースまで調子良く進む。逆に怖いくらいに順調だ。

「マップだとそこね」

確かにいかにも大事な物しまってますよ。つて感じが凄いな。暗証番号を入力しないと開かない扉。何だろう…ミッション・インポツシブルの主人公になった気分だな」

「あんたみたいなゾンビの目持つ主人公とか嫌よ」

「は？ 何だよいきなり」

「声に出てたわよ。エセトムクルーズさん」

うわ。恥ずかしつ。べ、別にトムクルーズに憧れてたとかじゃないんだからね!!」

「まあそんな事より。暗証番号わかるか？」

「今開けるわ。ちよつと待ってて」

そう言った御坂は何やらハッキングを行ってるようだ。数分後扉は開いた。

「じゃあお願い」

「あいよ」

データベースのパソコンにUSBを差し込みデータを引き抜く。それが完了したら数あるパソコンを全て破壊する。

「よし。警備ロボのハッキングよろしく」

「わかったわ。あんたも気を付けさないよね」

「善処する」

よし。やるか。

自分の影から大きい鎌を出現させ自分の周りのパソコンやら研究資料やらを全部切り裂く。爆ぜろ!!…使っちゃった…

切り裂いたとほぼ同時に警報が鳴り響く。よしここにはもう用は



無い。行くか。

「御坂。これからそつちに戻る」

「ええ。了解」

さて逃げますか。

「お疲れ様。にしてもあんたの能力本当にチートね」

「お疲れさん。こういう時だけ役に立つんだよな」

「さて。じゃあ次に向かいましょ」

「だな」

その日俺等5件の研究所破壊に成功した。もちろんデータのバックアップデータも全て破壊した。そもそもあのUSBはただ俺等がデータをコピーするだけでは無くウイルスが仕込んである。1度感染したらバックアップデータにまで侵入してデータを完全に破壊するものだ。

にしても、あいつ何でこんなの持つてんだ？

朝方になり解散する事になった。流石に朝から研究所を襲えば目立つ。それはまずいので、また昨日の夜と同じ段取りをする事になった。

さて1度寝たら今度こそエアコン買いに行かないとな。

昼になり御坂妹と出会った家電量販店へ向かう。

何だかブルーになるなこころくと。あながちそんな気分になるのも仕方ないのかもしれない。御坂妹と初めて出会い、関わりを持ったその日に彼女は死んだのだ。くだらない実験のせいだ。

「はあ。そんな実験早く止めさせないとな」

「うわ。ビックリした」

「あ、すいま…」

黙って歩いてたのにいきなり立ち止まって呟いてたらそりやビツクリするよな。謝らないと思った時…あれ？見当たらないぞお??

「ごつちです」

とフード付きの半袖でを着た少女がこちらを見ていた。

「おつおう。悪かったな。急に立ち止まったりして」

子供相手にも謝れる。俺は大人の見本のような男だな。

「いえ。それは大丈夫なのですが。あなた今失礼な事考えましたね？」

失礼な事？ いや特に考えてないな…まさか…目が腐ってるから疑われた…？

「いや何も考えてないぞっ！」

「いえいえ。あなたは絶対思いましたね？ 子供に謝れる俺超カッコイイと」

なんだと…この子だいぶ鋭い…

「いつ…いや思ってたねえし…」

「嘘をつく人はだいたい目を逸らします。特にあなたは目が超腐ってるので良くわかります」

「待て。話しに脈絡が無さすぎる。だいたい目が腐ってるのは関係ないだろ」

「いえいえ。これが実はあるんですよ。私の上司が超言っていました。目が腐ってる奴やウニ頭、金髪のバカ面の奴には基本関わらない方がいいと」

いや何でそんなピンポイントなの？ 誰だよ他2人は…

「あつそう…とりあえず悪かったな。じゃあこれで」

「待ってください」

「何だ…」

嫌な予感しかしないんだが…

「私は今超暇です。」

「だから？」

「あなが超ぶつかったせいで私は体中痛いんです。責任を取ってください」

またこれですよ。俺に話し掛ける奴って皆どつかしらおかしく無

いか？ しかもこいつ超超うるせえし…

「いや俺はこれでもなかなか忙しいんだよ…」

「じゃあ警備員(アンチスキル)に言ってもいいんですか？この人に超襲われかけたよ」

「よし。今すぐ遊びに行こう。アイスいるか？ 買ってやるぞ」

「はい。超よろしくお願いします！」

ちくしょう…やられた。俺の人生が危ないと思い仕方なく付き合ってやったらこれだよ…アイス買ってやった後飯が食べたいと言いつつ映画を観たいと言いつつ出陣し、映画はB級のいや最早C級に近いつまらない映画を俺の金で観せられ、終わったらハンバーガー屋でジャンクフード買わせられて、更にこうして公園でクレープ買わされるし、エアコン買えなかつたし…あれ？ デートじゃね？ いや相手は子供だぞ…何考えてんだが。ついついお兄ちゃんスキルが発動して好きな事させすぎた…

「いやあ。超楽しかったです！ ありがとうございます。比企谷」

「ああそう。つか俺お前の名前知らねえんだけど」

「言ってますでしたね。改めまして私絹旗最愛と申します！ 最悪の最に愛情の愛で最愛です！」

「あいよ。よろしく」

「はい！ それにしても比企谷貴方は目が腐ってはいませんが超いい人なんですすね！」

「褒めてんだが貶してんだが良くわかんねえよ…ん？」

そんなたわいのない話しをしてると携帯が鳴ってる事に気づく。恐らく御坂だろう。

「悪い電話だ」

「どうぞどうぞお構いなく」

クレープ頬張りながら気を使われてもな…

「あー。もしもし」

「もしもし？ 今日なんだけど13学区のホテルに集合ね。1405号室で予約取ってあるから！」

「分かった。時間は昨日と同じか？」

「ええ。お願い」

「了解。それじゃあ後で」

「ええ。じゃあね」

さてと…そろそろ帰って準備しますか。

「悪いな」

「いえいえ。それより比企谷私はそろそろ帰ります。どうやら本日は仕事があるようなので、超上司から呼びされました」

「何だよその超上司って超サイヤ人かなんかかよ」

「まあ…かめはめ波みたいなの出しますしあながち間違いではありませんよ」

「いやお前の上司怖すぎだろ…」

「では比企谷！ またいずれ何処かで会った時は付き合ってください！」

「ああ。気が向いたらな。気を付けて帰れよ」

「はい！ ではでは」

あいつあざといな。まあ2度と会う事も無いだろ。さて帰りますか。

13学区のホテルに着き部屋に入る手続きをする。この手続きする時間は物凄く恥ずかしい。何故なら予約を取ったのは御坂だ。つまり御坂の部屋で俺と一緒に泊まると思われる。絶対やばい。勘違いされそう…やってる事はなかなか物騒な作戦会議だったりなんだけどな。

「よお。待ったか？」

「全然。私さつきまで寝てたし」

「そうか。じゃあそろそろ行くか」

「ええ。そうしましょう」

順調に研究所を潰し回って今日最後の研究所に着く。

「割と大きいわね」

「ああ。まあなんとかなるだろ。何かあつたら頼むぞ」  
「ええ。わかつてるわよ」

これで今日は最後だ。ちゃつちやつと終わらせませすかね。なんて事思いながら研究所を探っていると、どこかで物凄い音がする。

「なんだ？ おい御坂なんかあつたのか？」

「わからない。モニターには何も映ってないわ」

「あらあ？ あんた随分目が腐ってるのね」

奥から女の声が聞こえる。つたく今日で2人目だぞ。目が腐ってるってイジられるの。

「うるせえよ。つうか誰だよ」

「あらあら。私達に興味があるのかしら？」

「は？ 興味なんかねえよ。あるのは、研究室にあるデータだ」

「データ？ ここそんなに大切なデータがあんのかしら？」

「さあ？ まあどうでもいいってわけよ」

「そうですよ。超さつさと終わらせましょう」

ん？この声…

「えっこいつ凄い目が腐ってるってわけよ」

「本当だ」

「ん？ 目が腐ってる？ あっ！」

「おっお前…絹旗か…」

「比企ヶ谷…どうして超ここに…」

「何？ 絹旗の知り合い？」

「えっ…ええ」

「お前何でここに…」

「まあ何でもいいけどさ。絹旗仕事だからな？ 情とか入れんなよ？」

「…」

「絹旗？」

「滝壺無理ってわけよ。絹旗は優しいからね」

おい何だこれ…何で絹旗がここに…

「お前等一体何者だ」

「逆に聞きたいわね。あんた絹旗の何？」

「今日知り合った関係だ」

「あっそう。まあ私達には関係無いからさ。仕事だからあんた消すわよ」

「そうそう。絹旗は無理でも私達は殺るってわけよ」

「んで、私達の事だけど冥土の土産に教えてあげるわ。私達はアイテム。学園都市の暗部よ」

暗部だと。

## 闇

「暗部?」

「あら、知らないの? 平和ボケした学生さんね」

「あ? 平和の何が悪いんだよ。平和なめんな」

「口だけは達者なのね。まあいいわ。フレンド。やるよ」

「オツケー! 麦野」

「ちっ。おい御坂」

「何? 何があつたのよ?」

「色々問題発生だ。暗部とか言う連中に絡まれて大ピンチだ。助けてくれ」

「何かあんたダサイわね…とりあえず、そっち向かうわ」

「頼む」

「あら? お仲間?」

「だつたらなんだよ」

「そいつも消すだけよ」

この状況はかなりマズイ。状況や雰囲気、会話の内容的に間違いない。戦闘経験がある集団。かたや俺は戦闘経験がほとんど無い。どうする。この場の打開策が一切ない。御坂が来るまでの約10分程つとここか…絹旗に助けを求めてみるか? いや、絹旗とは親しい間つてわけでも無い。何よりあのリーダーっぽい年増女。あれは雰囲気がかやばい。裏切ったり仕事を滞らせでもしたら絹旗が危ない。

「なあ。少し交渉をしないか?」

「ここは一か八かだ。時間稼ぎながら御坂の救援を待つ。」

「交渉?」

「ああ。俺達の目的はそもそも研究所の破壊だとかそんなんじゃない。ある実験のデータが欲しい。それだけあればここに用は無い。だから見逃してくれないか?」

「わかつてるんだけどな。無理な事ぐらい。」

「ふふふ。バカなのあんた?」

「だと思っただよ…！ 危ねっ！」

「あら。随分と身のこなしがいいのね」

「おいおい。絹旗が言っただかめはめ波ってそういう事かよ…死ぬだろ当たったら」

「ええ。死ぬわね。て言うか殺すつもりでいるんだし関係無いでしょ？」

「はっ。可愛い顔して物騒な事言うババアだ」

「!!」

「あっ…」

「ん？」

何か様子が変わる？ 何があったんだ。

「あつ、あんた！ 今すぐ謝りなさい！ 殺されるわよ!!」

「あ？ いや謝っても元々お前等俺の事殺すつもりだろうが…何訳のわからない事を…うわー！」

「殺す…殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す…！ 絶対に殺す!!!!」

はあ？ 何でいきなりキレたんだよ…どうなってやがる。つかこいつのビームやべえ…このままだと間違い無く死ぬ…御坂あ…早く助けてえ…

「ちっ。仕方ない」

こうなつてはもう戦うしか道が無い。そう思いつつ、ビーム女に近づいて行く。

この近距離ならそのビームも打てねえだろ！

「なっ…！ フレンド!!」

「OK 麦野！」

ん？ ぬいぐるみ？ なんでこんな物投げて…!!

「クッソ…」

その瞬間物スゴイ爆発音が発生する。危ねえ…影纏って無かったら死んでたぞ…まさかあの近さで爆弾投げてくるとはな…これが暗部。確かに個々の能力はさほど脅威でも無い…ただ長い事やってるチームなんだろうな。この連携が鬱陶しいな。

「流石に死んだんじゃない？」



「どうかしらね…ん？」

「フウ…」

「なっ！…なんで？」

「能力で逃げたのかもね…絹旗!!」

「！…っはい…」

「いい加減やるよ。ボサツとすんな！」

「…はい。比企谷悪く思わないでください。これも仕事なんです…!!」

絹旗がそう言いながら突っ込んで来る。まずいな。正直絹旗には一切攻撃をしたくない。いや能力そのものを使用をしたく無い。くっそ！あの年増あ。余計な事しやがって。あの年増黙らせて絹旗とは戦わない道を…なっ！

「はあああああ！」

「おい絹旗！」

絹旗の攻撃が壁にめり込み驚愕する。いやビビるでしょ。相手女の子だよ…こ、殺される…

「逃げないでください比企谷!!」

「バカかお前！…そんな壁に拳がめり込むパンチ受けたら死ぬだろうが…まずいつ！」

「じゃあな」

あの年増絹旗ごと。

「絹旗あ!!」

「えっ」

爆発音共に吹き飛ぶ俺等。

「うっ…」

「おい絹旗…しっかりしろ！」

「ひっ比企谷…」

良かった気絶しただけか…クソ！あの年増…ん？肋骨やってんなこれ…よく漫画やアニメで見るとあれだ…マジで許さねえぞあの年増…俺だけならまだしも。絹旗はお前等の仲間だろうが。

「おい…」

「あら生きてたんだ。絹旗無事？」

爆弾娘も心配なのかこちらをずっと見ている。

「ああ」

「さすがに絹旗もあれくらいじゃ死なないか。さすがねあの子も」

「黙れ。お前自分が何したかわかってんだだろうな」

「ええ。絹旗を囷にあんたを殺そうとしたのよ？　なんか文句あるかしら？」

「は？文句しかねえよ。お前仲間を何だと思ってたんだバカたれ」

「何って道具に決まってるでしょ？　何言ってるの？」

「じゃあその爆弾娘やピンクのジャージ着たそいつもそんな風に思ってるのか？」

「道具は代わりがあるものよ？　フレンダは道具でも滝壺は代わりが無いからそうはいかないわね。フレンダはそうね。そうやって使うかもしれないわ」

「っ！　麦野…？」

「あら不満？」

「不満に決まってるんだろ。人は道具じゃねえんだよ」

「いいえ。道具よ。ビジネスに必要なね」

「もういい。お前と話していてもイライラするだけだ」

「あつそ。じゃあ早く死んでくれるかしら？」

やべえよ。久々にキレちまったよ。絶対こいつ許さねえ。その瞬間何故だろう。俺の何かがキレた。

「フレンダやるよ!!」

「うっうん…」

「死ねえ!!!」

ビーム女のビームを交わしつつ爆弾を影で落としていく。

「影で？　あいつの能力は影？」

年増達の攻撃が止んだ瞬間を俺は見逃さない。

「ちっ！」

「えっ…麦野…」

こいつまた…今度は体制を崩してるフレンドを盾代わりに…お前にはそれ相応の罰を受けてもらうぞ。 麦野

「どけ」

「きやつ」

フレンドを転かす程度に能力でいなして真っ直ぐ麦野に突き進む。

「はっ。直線上なら外さねえぞ!!!」

「やってみろ年増」

麦野がビーム真っ直ぐ打ってきた所を影で打ち返す。

「きゃあああ!」

「自分の能力で攻撃を受ける気分はどうだよ。絹旗やフレンドはお前の道具じゃねえんだよ。もうお前は謝っても許さないぞ」

自分の影から鎌を持った巨大な影を具現化させる。

「まっ待つて!落ち着きましたよ。さっきの交渉乗るわ。乗るから…滝壺おお!!何とかしろ!!お前の能力使え!!」

「ごめん麦野。今の麦野は嫌い」

「なっ!おい待て、私に手を出せば学園都市の闇を相手する事になんだぞ!! そんな事して平和な生活が出来なくなるぞ!」

「行くぞナイトメア」

「待てええ!!」

「死んで悔い改めろ」

「いやああああ!!」

俺は麦野を殺さなかった。

「なっ、何で…」

「お前を殺さない代わりに約束しろ。お前達アイテムの解散。それとお前に関して言えば仲間を大切しろ。次こう言う事が起きたら俺がお前を殺すぞ」

「…」

そう言うのと麦野は気絶した。ふう。疲れた。

「ありがとうございます。比企谷」

「無事か絹旗。怪我は大丈夫か?」

「ええ。どつかのお人好しが守ってくれましたからね!」

「あんたかつこよかつたつてわけよ!!」

「はいはいどうも。それより今後お前等の暗部活動は許さないからな。やるんじゃねえぞ」

「はい。これでも麦野は義理堅い人です。直ぐに私達アイテムを解散させると思っています。ただそれでも私達は麦野と一緒に居たいです。ここは私達にとって大切な場所だから」

「絹旗…」

「一緒に居ることは構わないだろ。友達なんだろう？」

「はい!!」

「よし。じゃあ俺は行くぞ。麦野を頼む」

「はい!超お気おつけて!」

「ああ」

そうして俺は本来の目的地のデータベースへと向かう。

「あいつなかなか良い男つてわけよ」

「そうですね。初めて見ました。あんな目の腐ったヒーローは」

「絹旗あのゾンビさんの事好きなの?」

「なっ! 何言ってるんですか滝壺さん!」

「絹旗の初恋つてわけよ!!」

「フレンジダ!!」

何コレ。あいつから救援要請来たから来てみればなんか戦闘らしき痕跡あるけど終わってるし…誰この人達…

あつ!御坂に連絡すんの忘れてた…

## 解放

美琴「あれはどう言う事かしら?」

八幡「いや…あれがあれで…」

はい。ただ今御坂様大変御立腹でございます。まあそりやそうだよな。救援呼んできて、戦闘終わってるし敵っぽい連中と喋ってるし目的のデータ破壊終わってるし…俺なら帰るレベル。ただここ病室なんで放電しないでね…

美琴「まあいいわ。で? 彼女達は何?」

八幡「何か…暗部? とかって奴ら」

美琴「つまり学園都市の闇…こいつらも実験に関与してるんじゃない?」

八幡「いや暗部は辞めるって言ってたし、たぶん実験とは直接かわり合いは無いと思うぞ?」

美琴「じゃあ何で実験データを守ってたのよ」

八幡「よし。絹旗説明してやれ」

絹旗「何で上からなんですか…まあいいです。私達アイテムは命令されてここに来ました。命令内容は研究所を破壊する奴を殺せと」

美琴「つまりあの実験とは無関係って事か。ならその命令した奴は関係者なんじゃない?」

八幡「いや違うな」

美琴「は? 何でよ」

八幡「もしそいつが関係者ならアイテム以外の連中にも俺等を殺すよう言うはずだ。だが今回アイテム以外は誰も居なかった。なら絹旗達に命令をした奴は、アイテムの仕事を管理する奴と見て間違いないだろ」

美琴「つまり、依頼を受けてそれを彼女等に言っただけ?」

八幡「まず間違い無いだろうな。つまりその管理者に依頼した奴が実験関係者だな。なあ絹旗」

絹旗「はい。なんででしょうか?」

八幡「もし可能ならその依頼主を探れたりしないか？」  
絹旗「超厳しいかもしれません。今回は匿名で、情報が一切無いと言っていました」

だめか。もしかしたら実験の発案者を聞き出せると思ったんだがな。

八幡「分かった。ならまだ研究所潰しは続行だな」

美琴「そうね…とりあえず今日は帰るわね。そろそろ朝になるし」

八幡「ああ。また夕方に連絡くれ」

美琴「分かったわ。あんたちやんと養生しなさいね。じゃあね！」

八幡「わかってる。ありがとうよ」

絹旗「超騒々しいんですね。超電磁砲って」

八幡「何であいつが超電磁砲って知ってるの？」

絹旗「知らないわけないでしょ。彼女はレベル5の中で一番有名なんですよ？ 麦野が自分より序列上で超嫉妬してました！」

へえ。あいつそんな有名なのか…あのチーム女より科学的に価値があんだな。まあ電気だしな…ん？ 序列？ え？ 序列!! 大事な事だから2回言いましたよ？

八幡「待て待て。え？ あのチーム女レベル5なの？」

絹旗「はい。言ってますでしたっけ？ だから超不思議なんですよ。どうして比企谷が勝てたのかよくわかりません」

あいつレベル5だったのか…どうりで強いわけだよ。ふう生きて良かった。

八幡「まあ奇跡だよな。俺戦闘経験ほとんど無いのに。レベル5って戦闘経験無くても割となんとかなるのな」

絹旗「待つてください。超待つてください。比企谷ってレベル5なんてですか？」

八幡「言つて無かったか？ 俺最近レベル5になったんだよ。序列は一応6位」

絹旗「え…それなのに戦闘経験0なんですか…？」

八「まあな。中学生の頃に急に使えるようになって、制御の仕方を学ぶ為に学園都市に来た感じだしな。それまで喧嘩なんてした事無

かったし、痛いのだし」

絹旗「それで麦野に勝てるあなたはいったい何なんですか…化物か何かですか？」

八幡「いや、お前めっちゃ失礼だな…」

俺だつてビククリしてんだからな。まあ奇跡以外なんにも無いだろうな。ただ…あの瞬間頭が真っ白になったのはいったいなんだつたんだろうな。

絹旗「すいません。超驚いているので…」

八幡「まあいいけどよ…とりあえず俺はそろそろ寝るぞ」

絹旗「わかりました。私は麦野の病室に居ますので何かあったらまた来ますね！ それと一応依頼主については麦野達に言つて調べてみます」

八幡「そうか。ただあのビーム女が手伝つてくれるか？」

絹旗「麦野はああ見えて凄く優しいんで超大丈夫です！」

八幡「じゃあ頼めるか？」

絹旗「分かりました！ ではおやすみなさい」

八幡「ああ。おやすみ」

絹旗「あ！ あの…比企谷…」

八幡「ん？ なんだ？」

絹旗「…」

何だ？急に…まさか!!

八幡「おい絹旗お前まさかどつか怪我してたんじゃないのか!？」

絹旗「ち、違います！ いえ…そのありがとうございます。私達はまだこんな歳なのに人を何人か殺しました。ただそれは基本麦野が全部背負つてくれました。私達に罪悪感を感じさせないために」

正直驚いているのが本音だ。人を道具のように思つてるような奴がそんな事をするとは思えないからだ。

絹旗「ただあの時は比企谷の件でイライラしてたのもあったり、私が迷つてたからつて言うのもあるのかもしれませんが。麦野は裏切りは絶対許しませんから。ただこうして私達アイテムは比企谷のせいで解体させられました。だから麦野や私達はようやく光の道を歩め

ます…ありがとうございます比企谷…本当に超ありがとうございます…」

そうか…こいつらは好きで暗部の人間になったわけじゃない。麦野にしても絹旗達にしても。ようやく人として、いや1人の女の子として真つ当な道を歩ける。それが心の底から嬉しいのだろう。絹旗は泣きながら何度もお礼を言ってきた。その姿は最愛の妹とイメーヅが被る。だからかお兄ちゃんスキルが発動してしまいつい泣き止ませる為に抱きしめてしまった。ああ…これマジで恥ずかしい…

八幡「まあ…泣くな。これからはもう一般人としてお前等アイテムは生きて行くんだからよ。ちゃんと学校にも行けよ？」

絹旗は泣きながら頷いていた。これで良かった。こいつらに殺しなんてさせてはならない。手を汚すのは俺みたいな奴等で充分だ。

絹旗「…あ、あの比企谷もう大丈夫です…／＼」

八幡「そうか。じゃあまたな」

絹旗「はい！また！」

部屋を出て行った瞬間枕に顔を沈めながら1人で小さく叫んだ。めっちゃ恥ずかしかつたと…。絹旗最後は笑ってたしきつとこれからは、楽しい生活を始めるんだろうな。俺はそれが嬉しかった。

八幡「寝よう…」

柄にも無い事を行い、柄にも無い事を言つて、柄にも無い事を考えてる自分がめっちゃ恥ずかしい…そんな事を考えているとすぐに睡魔が襲い眠りについた。

「…が…や」

ん？ 何だ？ 小町か？ まだお兄ちゃん眠いんだよ…

「ひ…や…超…きい」

つたく…これはお仕置きだな。

八幡「お兄ちゃんもう少し寝たいから5分寝かせて」

そう言いながら横にいるであろう小町を抱き枕代わりにする。

「…／＼」

「おい」



ん？ 今度は母さんか？ 珍しいな…意識が覚醒し始め、目を開くと。顔が真っ赤になる絹旗とそれをイライラしながら見てる麦野さんの顔が見えました。

はい…人生終わりました…

## 和解

麦野「どういう事かしら？」

八幡「いえ…そのあれがこれであれまして…」

ねえ…このやり取り最近しなかった？ いやしたな。めっちゃデジャヴ何だが。あれ？ 何だろ？ 俺昨日から怒られすぎじゃない？ 絹旗も顔真っ赤にして下向してるし。そりゃいきなり俺何かに抱きしめられたら怒るか…俺なら泣くレベル。自分で言ってる悲しくなってきた…

麦野「まあ。そんな事より昨日、私の妹分がずいぶんお世話になっ  
たみたいね」

お世話…？ え？ まさか絹旗昨日泣きながら抱きしめた件麦野に言っちゃった感じ？ やばくない？ 人生本当に終わらない？ 風紀委員に呼び出しくらわない？ ああ…妹よ…お兄ちゃんもうダメみたいだよ…こうなったら土下座でもなんでもしてやんよコラア！

麦野「その…かんし…」

八幡「すみませんでしたあ!!!」

麦野「は？」

絹旗「え？」

八幡「いえ…昨日のは完全に不可抗力にございます。絹旗さんが泣いてらっしゃったので、お兄ちゃんスキル発動がしてしまい慰めたんです。決して他意はありません！ すいません!!」

どうよ。完璧なまでの土下座。そしてちゃんとした理由。麦野  
チエックメイトだ。お前はもう俺を怒れない!!

麦野「あんた何を言ってるの？」

八幡「はい？」

麦野「あなたにお礼を言いに来ただけなんだけど？」

あんれえ？ 怒られるシュチュエーションだったじゃん。完全に  
キレそうだったじゃん。ああ…ビツクリした。

八幡「あ…うん。何かすいません」

麦野「絹旗。こいつ大丈夫なの？」

絹旗「超問題ありません！これが比企谷ですから！」

そのフォローの仕方は如何なものですかね…？」

麦野「そつ。まあいいわ。とりあえず話しを戻したいんだけどいいかしら？」

八幡「あ、はい。すいません。どうぞ」

麦野「色々悪かったわね。あの時は。あんたのおかげで学園都市も私達アイテムに利用価値が無いつて判断してくれたらしくて私達アイテムは解散。私達はこれからは学生としてこの街で生きていけるわ」

八幡「別に俺のおかげとか無いだろ。特に何もしてないぞ」

絹旗「いえいえ。アイテムのリーダーであり、最強の麦野に超勝つたんですから。何より1対4の状況下で勝てなかった私達は仕事をまともにこなせないと言う烙印が押される事になります。そうなる仕事との依頼数は激減しますのでアイテムは維持出来なくなります」

麦野「そのおかげで私達はアイテム…ううん。暗部そのものを辞める事が出来る。私達の上司もそれをわかってくれてね。今朝そういう話しになったわ」

八幡「そうか。ならちゃんと学校にも通えるんだな」

絹旗「はい！超通えます！」

麦野「ありがとう。感謝してるわ。それで私達も色々相談したんだけどあんた達のやってる事の手伝いをしたいの。いいかしら？」

八幡「昨日の夜の件か？ それなら是非頼みたい」

絹旗「いえ。それとは別にです。研究所の破壊を私達も手伝いますよ！」

八幡「ダメだ。そんな事したら普通の学生になれなくなる。お前等は真つ当な道を歩くんだろ？」

麦野「それとこれとは、話しが別よ。私達が手伝いたいから手伝うのよ」

絹旗「それに超バレないようにするんで大丈夫です!!」

八幡「そう言う問題かよ…どうしてもやるのか？」

麦野「私達が好きでやるのよ？ あんたにとやかく言われる理由は無いけど？」

いや…まあそうなんだけど。それ手伝う人の態度？ 半分ぐらい脅しじゃないそれ…

八幡「わかったよ…ただ条件として基本動くのは、麦野だけだ。絹旗達は、バックアップに回ってもらおう」

絹旗「それだと効率が悪くありませんか？ 何で研究所を破壊してのかは知りませんが全員でやった方がいいんじゃない？」

八幡「いや。効率云々の問題じゃない。とりあえず御坂に連絡を取って事情を話してからだ。俺一人で決めていい問題じゃないんだな」

麦野「聞いたけどあんたレベル5なんだって？ 超電磁砲もいんのになんでそんなにビビる事があんの？」

八幡「相手は、研究者達だけじゃない。学園都市最強一方通行だ」  
絹旗「一方通行ってレベル5第1位じゃないですか!!」

八幡「もちろん出来れば一方通行と事を構えたくは無いのが本音だ。ただあのクソみたいな実験は止めなきゃならない。必ずな」

麦野「どうやら訳ありみたいだね。実験って言うのが今回あんた達のやってる事のキーポイントかしら？」

八幡「さすが暗部のリーダーだな。その通りだ。ただこの話をするのはさっき言ったみたいに御坂が協力に対してOKを出してからだ。あいつが今回の一番の関係者と言ってもいいからな」

麦野「わかったわ。超電磁砲から連絡来たらちゃんと言いなさい」

八幡「わかってるよ…」

麦野「それじゃあ後でね」

絹旗「では比企谷また後で!!」

八幡「おう」

さて…ややくしくなってきたな。御坂怒りそう…まあ、麦野は大分大きい戦力になる。最悪一方通行と戦闘になっても3人ならなんとかなるんじゃないのか？

・・・勝てなさそう・・・あいつ笑ってる顔怖いし、全体的におっかないんだよなあ・・・

よし。気を取り直して今後の事を色々御坂とも話さないとな。

## 不安

麦野「こっちはなんなく終わったわよ」

フレンダ「さすが麦野ってわけよ！」

滝壺「みさか達は？」

八幡「こっちももう終わるぞ」

絹旗「さすが超影薄いだけありますね！」

八幡「ちよつと絹旗さん？ それはただの悪口ですよ？」

御坂「はいはい。おしゃべりはそこまでね。で？ どう？ 今回は収穫はあった？」

麦野「だめね。こっちも相変わらずもぬけの殻。大方データのバックアップだけ取って逃げたんでしょ」

八幡「こっちもだ。警備ロボは居ても最初の頃みたいに人がいるわけじゃ無い。アイテムが出て来た時からなんとなく予想はしてたが、やっぱり研究者達には既にバレてんな」

御坂「やつぱりか・・・一度ホテルで落ち合いましょ」

麦野「あいよ」

八幡「わかった」

実験を止めると決意した日からなんだかんだ、一週間が過ぎてた。2日前麦野達元アイテムの共闘宣戦の際御坂も最初は難色を示したが、一刻も早く実験を止めたいとの事で共闘を承諾。流れも良く、一気に実験中止にまで追い込めると思った矢先に研究所の破壊がバレていたのか研究所を襲撃しても人は居ない上にデータが既に消されてるなんて状況がここ最近ずっと続いてた。正直な話手詰まりな状況で、今なお実験が行われると考えるとついつい皆苛立ちを露わにしていた。さらによくない事は起こった。当初潰す予定の研究所を潰し終えてしまったのだ。今回も外れだと完全に詰みとなる。神に祈る思いで、今回襲撃を行ってみたが・・・結果は外れ。最早今の俺達にはどうすればいいのかさえわからなかった。しらみ潰しに学園都市全ての研究所を潰してたら時間がいくらあっても足りないうえに、真つ当な研究所もあるため下手な事はできないためどうしようもな

い状況だった。

麦野「んで？ どうすんの？ うちの上司もまだ時間がかかるの一点張りだし」

絹旗「このままじゃ実験が終わっちゃういますよね・・・」

麦野「やっぱりさあ・・・一方通行と戦うしかないんじゃない？ こっちにはレベル5が3人も居るんだしさすがのあいつも勝てないんじゃない？」

そう。レベル5が3人いる。この事実はかなりデカい。ただそれでも確信を持って言える。例え3人でも・・・

御坂「無理ね」

麦野「あ？ 何でそんな事が言え・・・」

御坂「麦野さん一方通行の能力知ってる？」

麦野「噂くらいにしか聞いた事無いのと、絹旗が第1位の能力で能力開発してるからなんとなくは知ってるわよ」

八幡「そうなのか絹旗？」

絹旗「はい。私達 置き去り《チャイルドエラー》が行った実験で一方通行の演算パターンを参考にして能力開発を行う 暗闇の5月計画と言うのやりましたので」

なるほど・・・つまり一方通行の能力を参考にした新しい能力開発をしたのか。だからこいつあんな強いのか・・・でも待てよ？ 一方通行の演算パターンを真似たってって事は考えや性格があいつに似るんじゃないのか？ え・・・こいつキレたらやばい子なんじゃない？ 気をつけよ・・・

御坂「ならわかるでしょ？ あいつの能力が」

絹旗「はい。名前の通り能力名は 一方通行《アクセラレーター》あらゆる 向き《ベクトル》を変える能力です」

フレンダ「？ そんなのが本当に強いのか？ 話だけじゃよくわかんないってわけよ」

八幡「バカかお前は・・・あらゆる向きを変えるって事はお前の爆

弾も麦野のビームも全部当たらないんだぞ？ それに向きを逆方向にすれば反射もできるし、直接相手に触るだけで人の身体を捻じ曲げる事だつてできるんだよ」

絹旗「その通りです比企谷。ただ特記すべき点は能力では無く学園都市最強になれる程の頭脳だと思います」

御坂「演算能力ね」

絹旗「はい。あの能力はあらゆる向きを変える能力ですが、その向きの性質や物量等がわかってないとできないと思います。実際超電磁砲は電気の性質を理解した上で電気系統最強の能力者としてレベル5になったと思います。比企谷や麦野も例外じゃないはずですが。ただ一方通行は、あらゆる物の性質や物量をしっかりと理解している。普通私なんかそんな能力を持っていたとしてやってみたら頭が超パンクしちやいます!!」

あいつやっぱりとんでも無いな。普通はその能力の系統を伸ばしていくが、一方通行のような能力は幅広く理解してないといけない。しかもかなり深く。それをやってのけるあいつの頭脳はまさに学園都市最強の名にふさわしいな。もやしのくせに・・・

御坂「実際私も超電磁砲を反射させられたし」

まじかよ・・・あれ反射させたの？ 前に一度見たけどあれすごいよ？

麦野「はっ！ 何だよじゃあお手上げってか？」

まずいな。一方通行の圧倒的な力の前に全体的に雰囲気が悪くなつてきてんな・・・

滝壺「じゃあむぎの。私の能力使えないかな？」

絹旗「おお！超それです！それしかありませんよ!!」

八幡「そういえば滝壺の能力って知らないな。どんな能力なんだ？」

麦野「滝壺の能力は 能力追跡《AIMストーカー》《AIM拡散力場に干渉して標的の位置を把握する能力よ」

八幡「は？ 何AIMって。ATM？」



御坂「あんた本当にバカな上に無知ね。本当にレベル5？」  
えっ・・・なんでデイスられてんの？ あれ？俺が悪いの？

御坂「まあいいわ。AIM拡散力場って言うのは、能力者が無意識に発生させてる微弱な力のフィールドのことよ。種類は人それぞれで私みたいな電気使いはこれを利用して空間範囲ができたりするの。麦野さんやあんたもちゃんと出てんのよ」

すげえ・・・力のフィールドとかかっこいい・・・どうしようちよつと男心をくすぐるな!!

麦野「ニヤニヤしないでくれる？ きもいわよ」

絹旗「超きもいです」

フレンド「きつしよ」

御坂「気持ち悪い」

八幡「おい止めろ。俺はそんなに打たれ強くないぞ・・・」

滝壺「そんな気持ちの悪いひきがやを私は応援してる」

八幡「すまん滝壺気持ちは嬉しいが、まったく慰めになってないぞ」  
滝壺「？」

そんな可愛い顔して首かしげんな。許しちゃうだろうが。

麦野「いいから話を戻すわよ。滝壺はただ、能力を追跡させるだけじゃ無く、AIM力場の逆流させて能力を乗っ取ることもできるのよ」

御坂「嘘でしょ？ そんな事出来る人がどうしてレベル5じゃないの？」

麦野「何回か実験してみたけど、成功したためしが無いのよ。それに滝壺の能力を実用レベルにまで上げる為に体晶って言う薬を使ってるの。だからあまり連続して使わせられないし、あまり使い続けると滝壺が持たないのよ」

御坂「そつか。ならダメね。滝壺さんの能力も一か八かなうえに私の問題に滝壺さんに無理させるわけにはいかないもの」

八幡「ならどうする？ 正直手詰まりだな」

御坂「そうね。一日考えましよう。またこいつに連絡するからその時また意見を出し合いましよう」

何かこいつ様子が・・・

麦野「じゃあ帰るわよ。比企谷明日頼むわよ」

絹旗「では比企谷また明日！」

滝壺「ばいばい」

フレンダ「しゃあね〜」

八幡「おうじゃあな」

御坂「じゃあ私も行くわね。また明日連絡するわ」

八幡「おい御坂」

御坂「何？」

八幡「・・・気をつけて帰れよ」

御坂「何それ。似合わない事すんじゃないわよ。またね」

何故だろう。特に何か根拠があるわけでもないのに不安になる御坂の奴変な事考えてなきやいいんだがな・・・

## 再会

御坂達と別れて家に着いて休もうとした時、一通のメールが届いた。内容は：

『もう、研究所の襲撃は終わり。全部終わったわ』

だった。絶対嘘だと思って、御坂に連絡しようとしたが終わったと言ってる以上あの頑固な子が素直に喋るとも思えなかった。

次の日：

夕方、クーラーを買いに行く際に麦野達にも連絡を入れて集まって貰う事にした。

理由としては、御坂の事を話す為だ。正直一人でどうこうできる気がしない。だからこそアイテムに助けて貰いたかった。俺として割と珍しい選択とは正直思ったけど：今はそんな事言ってる場合でも無いしな。ただ：

誘うのめっちゃ恥ずかしかった：どうしよう来てくれなかったら：なんて事を考えつつ、夜になり待ち合わせのファミレスで待っていると：

麦野「よう比企谷」

絹旗「お待たせしました」

八幡「よう」

良かった：来てくれて。これで来なかったら普通に泣く。

フレンダ「あれ？超電磁砲は？」

八幡「呼んでない。御坂の事でお前等に少し話がある」

麦野「何かしら？」

八幡「昨日の御坂の様子が少し変だった事に気付いた奴いたか？」

絹旗「さあ？あんまり関わった事が無いですからね」

まあ。そりやそうか。

八幡「いつもと少し様子が変だったんだ昨日。それに昨日の夜にも全部終わったって内容のメールが来た」

麦野「はあ？終わったって：終わって無いんだろ？」

八幡「本当はな。だがこのメールが来たって事はあいつもしかした

ら…」

滝壺「第1位と戦うかも」

フレンダ「はあ!?まじで!？」

八幡「たぶんだけどな。前に考えた事がある。あの計画は元々戦う意思のある、御坂が一方通行と戦う事が前提の計画だ。だがもし、戦闘意思が無くオリジナルの御坂が呆気なく殺されたら計算が狂うんじゃないのか。ってな」

麦野「確かにそうかもね…」

八幡「そんなを事他人である俺がすぐ思いついた。なら当事者の御坂も直ぐ考えるはずだ」

絹旗「じゃあまさか全部終わったって…」

八幡「今日御坂は一方通行に殺されに行く可能性がある」

フレンダ「まずいってわけよ!!」

八幡「ああ。だから集まって貰った。頼む御坂を探す手伝いをして欲しい!!」

麦野「まあ。あんたには借りもあるし元々手伝うって言ったのは私達だしね」

絹旗「超任せてください!!」

フレンダ「滝壺もいるしね!」

滝壺「うん」

八幡「すまない…。早速で悪いんだが、御坂の場所頼めるか?滝壺」  
滝壺「わかった。ちよつと待ってて」

八幡「それと御坂の居場所がわかったら行くのは俺1人だ」

麦野「は?何で?」

絹旗「そうです!超意味がわかりません!!」

まあですよね…絶対反論されると思ってました。

八幡「お前等が行けば戦闘になるだろ。俺あいつとは、とm…知り合いだから話し合いで解決したいんだ」

もちろん嘘だ。いくら知り合いとはいえ話し合いで解決できるような状況では既に無い。わかってはいるがこいつらを巻き込む訳にはいかない。

フレンダ「なんで今知り合いついていい直したのよ」

八幡「俺に友達は居なかったんだよ。間違えたんだ」

絹旗「さらりと超悲しい事言いますね…」

麦野「まあいいわ。あんたなりになんか考えがあるんでしょ。今回は裏方に専念するわ」

八幡「助かる」

麦野「ただし、危なくなったらすぐ連絡する事！あと終わった報告しろよな！」

八幡「わかってるよ。俺は痛い嫌いだって知ってるんだろ」

絹旗「超知ってます！」

滝壺「場所わかったよ。ここから南南西の場所」

八幡「助かる。終わったら連絡入れる」

麦野「あいよ」

絹旗「超頑張ってください！」

フレンダ「行ってらあ」

滝壺「行ってらっしやい」

八幡「行ってくる」

実験場

「その手を離しなさい 一方通行!!!」

一方通行「あア？」

美琴「あんたの相手は私よ！」

御坂妹「お姉様…」

一方通行「はア。これはどうりやいいんだア？オリジナルは殺すなって話したツタンだかなア？」

美琴「これ以上妹達は殺させないわ!!」

「ああ。その意見には賛成だがお前は後でお説教な」

一方通行「はア？」

美琴「嘘…なんで…あんたがここに…」

八幡「久しぶりだな 一方通行」

## 激闘

八幡「久しぶりだな一方通行」

一方通行「お前何でここに…」

美琴「どうしてここがわかったのよ」

八幡「企業秘密だ。それよりお前後で説教だからな」

美琴「説教ってそんな場合じゃないの！私がこいつに殺されれば…」

八幡「無抵抗で殺されれば計画はおじゃんか」

美琴「！どうしてそれを…」

八幡「少し考えればわかる事だ。昨日からお前の様子もおかしかったしな。俺の洞察力なめんな」

一方通行「おい。訳のわかんねエ事をベラベラと…俺はあん時忠告したはずだ関係無いから関わるなと」

八幡「ああ。言つたな」

一方通行「なら何でテメエはここににいる？まさか止めに来たのか？」

八幡「そうだと言つたらどうする？」

一方通行「ここにいる実験動物もろとも殺す」

美琴「あんた…!!」

八幡「おい。御坂妹は実験の道具なんかじゃねえだろ」

一方通行「はア？おまえマジで言つてんのか？こいつらは単価18万のボタン1つで製造出来る道具だぞ」

八幡「道具じゃねえって言つてのが聞こえないのか？ボタンで製造出来るからなんだ。18万で作れるからなんだ。そうゆう問題じゃねえだろうが」

一方通行「バカも休み休み言え三下ア。何度も言わせんな。こいつらは道具だ。俺がLevel 6になる為の言わば贄みたいもんだよ」

八幡「何が、贄だよ。お前はいつから召喚獣になったんだよ。学園都市最強の男の称号で充分だろ。それ以上何が欲しいんだよ」

一方通行「絶対的な力。歯向かう事すらバカらしいと思う程の絶対的力だ」

八幡「厨二病全開だな…お前の考えてる事についていけねえよ」

一方通行「誰もついて来て欲しいなんて言ってるねエよ。ンで？お前はあの俺とやり合うのか？」

八幡「出来ればやりたくねえな。話し合いで終わらね？」

一方通行「終わるわけねエだろ。もう引き返せねエ所まで来てンだよ」

だろうな。こいつやっぱり…

八幡「まあじゃあやるしかねえか…」

美琴「あんた大丈夫なの？相手はあの一方通行よ？」

八幡「まあ勝算が無い訳じゃ無い。なんとかする。お前はとりあえず御坂妹と一緒に後ろに下がってろ」

美琴「うっうん…」

さて…勝算があるとは言え、相手は学園都市最強の男だ。あいつの能力は正直厄介だ。だが、それはあいつも同じ。あいつの弱点は俺そのものだ。理由？簡単だ。影に物量や質量は存在しない。あいつの能力は俺の能力には完全対象外。そこは問題無いが…

一方通行「お前自分の能力が俺能力と相性が悪いとか思ってる。あめエんだよ三下。最強は誰にも負けねエから最強なんだよ。格の違いを教えてやるよ」

八幡「今日は良く喋るな。珍しい日もあんだな」

一方通行「殺す…」

その言葉と同時に一方通行が突っ込んでくる。

八幡「早っ!!」

あいつの能力はまず触られたらアウトだ。ここはまず…逃げる俺はすぐ影の中に隠れる。

一方通行「ちッ」

八幡「こっちだバカ」

格好つけながら一方通行を背後から全力で殴りつける。

一方通行「ぐはっ!!」

一方通行が衝撃で吹っ飛ぶ。間違いない。今この瞬間疑問が確定に変わった。

一方通行は能力無しの喧嘩は滅法弱い。まああんなモヤシみたいな身体してんだから当然か…

美琴「嘘でしょ…」

御坂妹「お姉様彼は…」

美琴「やる気の無い勇者よ」

一方通行「てんめエ…」

八幡「モヤシっ子能力に頼りすぎだ。体を鍛えろ」

一方通行「スクラップにしてヤンよ!!!」

一方通行は足元にあった線路を捻じ曲げてこちら飛ばしてくる。それを影で作りに出した手で全て掴む。

一方通行「いちいちウゼエなその能力」

八幡「お前とは最悪の相性だな」

一方通行「そうだなア。だがこれなら関係無いんじゃないやねエの？」  
そう言った瞬間俺の影が全部消え、線路がこちらに飛んで来る

八幡「クソツタレ！」

やっぱりバレたか…俺の弱点は影そのものが出て無いと能力発動が無理って事だ。足元を見てみると…

やっぱりな。捻じ曲げた線路の一部が俺の影に刺さってた。

一方通行「てメエの能力を聞いた時から考えてたんだよ。能力上自分の影が出る事が絶対的条件なんじゃないやねエかってな」

八幡「ご名答だ。流石学園都市最強だな。だがな…」

一方通行「ああ?…!!がはッ!!!」

話してる最中の一方通行がアツパーを喰らっていた」

八幡「お前は最強かもしれねえが絶対じゃないやねえんだよ。なめんな。白ウサギ」

一方通行「クソツタレが…」

八幡「一方通行。俺は珍しく怒ってるんだよ。自分勝手な御坂に。計画を言い訳に現実から目を背けるお前に。今日俺はここでお前に



勝つぞ。んで、わからせてやるよ。御坂妹は道具じゃねえって事を。実験は今日で終わらせてやる」

一方通行「…ンだよ」

八幡「は？」

何て言ったこいつ？

一方通行「ンな事わかってんだよ!!でも今更引き返す事なんかできねエンだよ!!Level6になれば全てが正当化されるンだよ!」

八幡「なるわけねえだろ。お前は殺した全ての妹達の十字架背負って生きて行くんだよ。俺にも妹が居る。その妹がお前の勝手な理由で殺されてた俺ならお前を絶対に殺す。御坂の気持ちもこれと一緒に。だからこそ俺はお前をここで止める。御坂の為。お前の為にな」

一方通行「最近Level5になった新参加者が言うじゃねエか…上等だよ。必ずブツ殺してやるよ!!」

一方通行はそう言いながら風のベクトルを変換してこちらに飛ばしてくる。

八幡「クソ…」

一方通行「影に質量や物量は無い。要するにお前の最大の弱点は風だ!吹き飛べ三下アアア!」

そのまま俺は見事に吹き飛ぶ。さらに運の悪い事に月が今の風のせいで雲に隠れてしまい影も出せない。つまり…

八幡「うがあ…」

今まで出した事も無いような声を出しちまった…ああ。鉄骨が腹に見事刺さってますなあ…こんな状況なのに一周回って冷静だわ。

美琴「比企谷!!」

一方通行「ギャハハ!どうしたよ比企ヶ谷アアア!俺を止めるンじゃねエのかア!」

八幡「クツソ…」

一方通行「いいねエ。随分といい姿になったじゃねエの!!」

八幡「お前の声はいちいち腹に響くな…モヤシのくせに…」

一方通行「まだそんな減らず口が叩けるンだ大したもんだなあ。流石はLevel5ツて所か」

八幡「おい一方通行…喋らずに戦いに集中したらどうだ？」

一方通行「ああ？　がはッ！」

一方通行から後ろから鈍器のような物で殴られた音と同時に一方通行が倒れる。

八幡「お前の能力で俺の能力の反射は出来ないならちやんと周り見てろよ」

ここでダラダラ時間は取れない。追い討ちをかける…そのまま一方通行の影で一方通行を締め上げようとするが…

一方通行「やらせねエよ三下ア！」

八幡「ちっ」

先ほどの線路の一部が一方通行の影を突き刺す。俺の相手の影を操る際の条件は相手との距離と影が何の干渉も受けて無い時だ。干渉を受けてる時は俺は操れない。だが…

一方通行「はッ！今殺してやるから覚悟s…」

そう言いかけた一方通行が物凄い勢いで吹き飛ばす。

八幡「線路に影が出来るなんて小学生でも知ってんぞ」

一方通行「クソツタレ…」

そう言いながらお互いボロボロだ。俺に関しては血の量がやばい。一方通行もここまで殴られるのは初なのか既に足だいぶきてる様子だった。

八幡「そろそろ終わらせるぞ一方通行…」

一方通行「上等だよ。潰しやるよ…」

そう言った一方通行は手を空に向けてプラズマのような物を作り出している。

八幡「おいおい…何だそれ。冗談だろ…」

一方通行「今まで試した事は無かつたからなア。光栄に思え三下。実験台にしてやるよ！」

風のせいで上手く影のコントロールが出来ない。かなりまずい…

一方通行「死ね」

プラズマがこちらに飛んで来る。影の発動が上手く出来ない今避けるしか無いのだが俺は今腹に穴開いてて上手く避けらんね…

「比企谷!!」

八幡「っ!!…御坂」

美琴「もう充分よ。あんたまで死ぬ必要は無いわ。私が死ねばそれで…痛っ!!」

御坂は頬を抑えながらこちらを見る。

八幡「お前いい加減にしないと本気で怒るぞ。簡単に死ぬとか言うな殺すぞ」

美琴「ちよっ何よ急に…」

八幡「任せろ。必ず勝ってみせる。約束する。ただ頼みが一つある」

美琴「何?」

八幡「風力発電を電力で逆向きに回してくれ。妹達は何人もいるんだろ?」

美琴「でも妹達の連絡先なんか知らないし…」

御坂妹「今生き残ってる妹達に指示を出しました。目の腐った貴方には数え切れない程恩がありますから」

八幡「助かる。お前等もあそこの風力発電やって来てくれ。」

美琴「わかった。死ぬんじゃないわよ!」

八幡「何度も言わせんなお前は後で必ず説教だ」

一方通行「今生の別れは終わったか?」

八幡「待っててくれるなんて随分優しいじゃねの」

一方通行「どうせ俺が勝つんだ。少しだけ猶予をやったんだよ」

八幡「終わりにしようぜ一方通行」

一方通行「終わるのはテメエだy…なんだ。どうゆう事だ。」

八幡「風のベクトル計算間違えたな」

一方通行「ありえねエ。俺の計算は完璧だッたはず…風?まさか!!」

八幡「風力発電って便利だよなあ」

一方通行「テメエ等…」

八幡「行くぞ一方通行!!」

掛け声と共に自分の影から巨大は人型の影を出す。影の右手が鈍

器となり振り下ろされる。物凄い音がしたと同時に俺は気を失った。唯一覚えてるのは誰かが『ありがとう』って言った事ぐらいだった…

## 決着

八幡「見た事無い天井だ…」

一度は言ってみたい名言のうちの一つを言えて少し満足したところで、自分が改めて病院に居る事に気づいた。

八幡「あの後、誰かが運んでくれたのか？」

まあ、普通に考えたらそうだろうな。でも誰が？御坂？いや、いくらなんでも俺を運ぶのは無理じゃないか？救急車？いやなんとなくだがそれも違う気がする…まさか…？いやまさかな？

なんて事を考えてるとドアのノック音が聞こえる。

八幡「どうぞ」

美琴「ん」

八幡「おう」

そこから10分程無言が続いたが、今はその無言が心地い。

美琴「ねえ」

八幡「なんだ」

美琴「実験はこれで中止だって」

八幡「何でそんな事知ってんだよ」

美琴「妹がね、言ってたの」

八幡「そうか」

美琴「ようやく終わったわ」

八幡「ああ。あいつもこれで少しは救われるかもな」

美琴「あいつは実験を楽しんでたんじゃないの？」

八幡「いやそれは無い。あいつが実験を始める前に色々話したりもしたが、本来のあいつはもっと優しい」

美琴「想像できないわね」

八幡「雰囲気は基本あんな感じだったが、人の話しは聞くし無益な戦いはしない奴だ」

美琴「じゃあ何であんな実験を…」

八幡「戦闘中言ってたろ。あいつはもう引き返せない所まで来てたんだよ。1人でも100人でも殺してしまった事に変わりはない。

だからこそLevel 6なればそれは、罪じや無くなると考えたんだろうよ。そして妹達を道具と言ったりしてたのは、人だと思いと本物の人殺しだと自分で認めちまう事になるとでも思ってたんだろ」

美琴「そんな…あいつも被害者みたいな解釈…」

八幡「いや実際俺は正直一方通行を被害者だと思うぞ。お前の妹達は無抵抗では無く、一方通行を殺そうとしていた。ある種正当防衛みたいなものだ」

美琴「じゃああの実験をあんたは認めるの!？」

八幡「いや。これも戦闘中に言ったが俺にも妹が居る。一方通行がいくら殺されそうになったからと言って俺の妹を殺せば俺は間違はなく一方通行を殺す。だから一方通行は間違いなく加害者でもある。俺は今回一方通行だけを責める事は出来ないと思ってるんだよ」

美琴「わからなくもないかな…」

八幡「ただ俺はお前が一方通行を許さないって気持ちは持つべきだと思う。あいつはそれくらい許されない事をやっただからな」

美琴「わかってる。この想いは一生消えないし消させない」

八幡「それでいい。ところで俺をここに運んでくれたのは誰だ？」  
美琴「アイテムの絹旗つて子。それにしてもあんた腹に穴開いて血が止まるってあれも能力か何かなの？」

絹旗「だったのか。後でお礼言わないとな…ん？ 血が止まる？ 待て…俺の能力にそんな力は無い。まさか…」

八幡「一方通行…」

美琴「え？ 何？」

八幡「いや…何でもない」

御坂に話す事でも無いか…実際どうかもわからないしな。

美琴「本当今日ありがとうね…大きい借りができたわね！」

八幡「気にするな。ちよつと思いう所もあつたからな」

美琴「そっか。また明日お見舞い来るわね」

八幡「お、おう。サンキュ」

美琴「何よ。不満そうね」

八幡「ばっか。どう反応していいかわからねえんだよ」

美琴「そっか。じゃあまた明日ね」

八幡「ああ。お疲れさん」

そう言って御坂は病室を後にした。さて流石に寝付けないうえに暇だし屋上でも言って風でも当たるか。

そんな事を思いつつ微糖の缶コーヒーを持って階段を上がる。

八幡「流石にきついな…それに千葉のソウルドリンクが無いと来たもんだ。学園都市はそこを見直す必要がある」

そんな事を言いながら屋上に着くと既に先約が居た。

八幡「一方通行」

一方通行「…」

見たくせにシカトですよこの人…

八幡「何たそがれてんだよ」

一方通行「お前も似たような事しようとしてんだろ」

八幡「実験中止だつてな」

一方通行「お前にやられて計算に狂いが出たんだとよ。再計算しようにも、ツリーダイアグラムが存在しないなら計算出来ねエしな」

八幡「これで良かった。あんな実験誰も救われねえだろ」

一方通行「ハッ。おめでたい頭だな」

八幡「は？」

一方通行「元々俺は救われていい人間なんかじゃねエんだよ」

八幡「だろうな」

一方通行「クローンだろうがなんだろうが人殺しは人殺しだ。結果は変わらねエ」

八幡「お前はずっと妹達の罪を背負って生きる。後今後妹達を守るのはお前の役目な」

一方通行「は？」

八幡「当たり前だろ。残りの1万の妹はほったらかしかよ。お前の実験の為に生まれたならお前が責任取れ」

一方通行「贖罪ツて事か…」

八幡「ああ。それがせめてもの罪滅ぼしだろ。罪は一生消えないけどな」

一方通行「チツ。んな事お前に言われなくてもわかっただよ」

そこから無言が続いた。風が心地いい。今日1日何も無かったような気分させる。しかしあつたのだ。今日俺はこの隣のウサギと戦った。何とも不思議な気分になる。

八幡「おい」

一方通行「なんだよ」

八幡「止血助かった」

一方通行「あア？」

八幡「止血だよ。お前が俺の血を逆流させてくれてたんだろ？何でだよ」

一方通行「別に。ただの気まぐれだ」

八幡「ツンデレウサギかよ」

一方通行「潰すぞ」

八幡「すいませんでした」

一方通行「チツ。ある種の礼みたいなもんだ」

八幡「は？」

一方通行「俺はもうあの時引き返せ無かった。だがお前に負けてようやく終わった。その礼だ」

やっぱり俺の考えはあつてたか…。こいつはやりたくて実験をやつてた訳じゃ無い。やるしかなかった。他に道が無かつた。一方通行も間違いなく被害者なのだ。だが…

八幡「例えそうでもお前はやつてはいけない事をしたけどな」

一方通行「わかっただよ」

八幡「だが俺はお前も被害者側だと思ってる」

一方通行「本気で言ッてンのか？ 随分おめでたい頭してんな」

こいつは一々罵倒しないと喋れないのか…

八幡「妹達は無抵抗じゃ無かつたんだろ。向こうも武器を持ってお前を殺そうとした。それも紛れもなく事実だ」

一方通行「クツだらねエ。あいつらが武器を持つとうが結局俺が殺した事に変わりはねエだろうが」

八幡「ああ。だからお前のやつた事を正当化するつもりも無い。だ



からこそ罪は罪と認めて今後生きて行けばいい。死んだ1万の妹達  
の為に今後お前は生きてる1万の妹達を守る為に生きて行く。これ  
がお前の生きる理由だ」

一方通行「ハッ。ヒーロー様は言う事が違うじゃねエか」

八幡「俺がヒーローなんて柄かよ。今回は知り合いが絡んでたから  
たまたま動いただけだ」

一方通行「そうかよ」

八幡「新学期からはちゃんと来いよな」

一方通行「あ？」

八幡「学校だよ」

一方通行「行くわけねエだろうが」

八幡「いや何堂々とサボり発言してんだよ。田舎のヤンキーかよ」

一方通行「学校行ッてる間に妹達になンかあッたらどうすんだよ」

八幡「ああ。なるほどな。それなら勘弁してやるか」

一方通行「なんの上からなんだよウゼエな」

ええ…この子根本は変わってないのね…

一方通行「ありがとな…」

小さな声で、誰にも聞こえない程の声で一方通行はお礼を  
言ッて屋上を出て行ッた。俺がボツチで聞き耳スキルが高く無かつ  
たら聞こえ無かつたらう。そして、今辻褄があッた。一方通行との戦  
いの中気を失う前にお礼を言ッたのは間違いなくあいつだった。

誰かに救ッて欲しくて、でも誰も助けてくれなかつたのだろう。こ  
れからのあいつはきつと妹達を守る為に生きていく。自分の命より  
妹達の命を優先して動くはずだ。あいつはきつとこれから変わつて  
いくのだろう。もちろん各々色々な想いはあるだろうが、今回はこれ  
で完全に決着がついた。

残りの1万の妹達も安心して生きていける事だろう。御坂も安心  
して妹達と学園都市で暮らせるだろう。そして一方通行も…

八幡「微糖苦げえ…」

## わだかまり

激闘から早1週間。

病院での生活も終わり、無事退院できた。

しかし俺の安息は全然終わる気配が無さそうだった・・・

フレンダ「遅いってわけよ!」

絹旗「超ノロマです!」

麦野「遅い」

滝壺「いくらなんでも遅い」

八幡「・・・なんでいんの」

無事退院できたと思つたら、出口でまさかのアイテムに捕まってしまった。

絹旗「今日は退院祝いに私達と超ご飯いきましよう!」

なんだよ超ご飯って。ドラゴ○ボールかよ。

八幡「悪いな今日は先約がいる」

フレンダ「へ?比企谷に先約!」

絹旗「超あり得ません!」

あなた達本当失礼な子だな・・・

麦野「なんか訳ありなわけ?」

八幡「まあな。御坂達とちよつと約束がな」

絹旗・フレンダ「!!」

麦野「なるほどね」

滝壺「約束?」

八幡「ああ。今後の方針もかねてな」

麦野「まつ。そう言うことなら仕方ないね」

八幡「悪いな」

今日は確かに御坂達と約束がある。嘘じゃないしまあいいだろ。

麦野「ならまた近いうちに祝勝会やるよ」

絹旗「超やりましょう!!」

八幡「まあ。時間があつたらな」

フレンダ「いつも暇じゃんあんた」

絹旗「超その通りです！」

麦野「本当ね」

「本当この人達本当辛辣な言葉言つて俺を殺そうとしてんのかよ。」

八幡「んじや。またな」

絹旗「はいでは超また！」

今日は確かに御坂達と予定がある。ただ白うさぎも一緒だが。

八幡「一方通行。俺だ」

一方通行「ンだよ」

八幡「今退院したわ」

一方通行「だから？」

八幡「お前なあ。悪態つくのもほどほどにしろよ？友達いなくなるぞ」

一方通行「もともとそんな軟弱な者いねエよ」

八幡「寂しい奴め」

一方通行「ぶッ飛ばすぞテメエ」

八幡「はいはい。んで、どこ行けばいいんだよ」

一方通行「駅前のファミレスに來い。超電磁砲と妹達もいる」

八幡「もう居んのか？」

一方通行「ああ」

八幡「すぐ行く」

つかあいつら一緒にして大丈夫なのかよ。早く行くか……

八幡「悪い待たせたな」

御坂「ええ」

御坂妹「はい」

一方通行「……」

いやこいつらどれくらいこの雰囲気の中待ってたんだよ……俺なら死ねる。

八幡「お前等どれくらい待ってたんだよ」

御坂「2時間かしら」

御坂妹「私はお姉様と一緒に来ました」

一方通行「1時間だ」

こいつら約1時間こんな重苦しい空間に居たのかよ。すげえな。

八幡「さて始めるか」

御坂「その前に」

八幡「なんだ？」

御坂「私はこいつに妹達は、任せられない」

一方通行「あア？」

八幡「どうした？」

御坂「どうしたじゃないわよ！あんた忘れたの？こいつがやった事！！」

八幡「忘れてる訳じゃねえよ」

御坂「じゃあなんでこいつに妹達を任せるなんて結論に至るのよ！！」

八幡「じゃあ逆にどうするんだ？確かに一部の妹達は冥土返しのツテで海外に行ったが学園都市にはまだ、何人か残ってる。こいつらを守る役が必要だ。その適任が一方通行なんだよ」

御坂「だからなんで・・・」

八幡「じゃあお前一人で全員守ってやれんのかよ」

御坂「!!」

八幡「お前には、学校や仲間。守ってやらなきゃいけない奴等がいる。その点一方通行は暇だしな」

一方通行「おい」

八幡「一番の理由は単純に強い。こいつらを守ってやれるのは一方通行だ」

御坂「それはそうだけど・・・」

八幡「それにこいつは殺した約1万人の妹達のために今生きてる約1万人の妹達を助けてもらう。それがこいつの贖罪だ」

御坂「・・・」

一方通行「おい。超電磁砲」

御坂「・・・何よ」

一方通行「勘違いすんなよ。俺はこいつら妹達を助けることは受けてもお前については、謝ったりなんて事はしねエぞ」

御坂「あんた・・・」

一方通行「そもそもお前が血液の提供なんかしなかったらこの実験そのものが無かった。お前も加害者の一人って事忘れんな」

御坂「うつ・・・」

八幡「一方通行。よせ」

御坂妹「お姉様少しよろしいですか？」

御坂「何？」

御坂妹「確かに私達、妹達は一方通行に殺されました。しかしそれはある意味仕方のないことなのです」

御坂「何が仕方ないのよ!!」

御坂妹「この白もやしを擁護するわけではありませんが、私達も武装していて可能なら一方通行を殺そうとしていた。これは紛れもなく真実です。確かに私達は数多く殺されました。しかし数多くの妹達が一方通行を殺そうとしたのまた事実なのです」

そう。それは真実だ。御坂妹は一方通行を殺そうとした。これはある種正当防衛とも取れるのだ。

御坂妹「私達の半分は一方通行に感謝してる個体がいます」

一方通行「はア？」

御坂「は？」

八幡「・・・」

御坂妹「彼が居なければ私達は生まれもしなかった。そこについては私達は感謝してる所ではあるのです」

御坂「そんな・・・殺されるために生まれてきたのに感謝って・・・」

八幡「御坂!!」

御坂「!!」

八幡「お前がそれを一番言っちゃいけないだろ。こいつらにその言葉だけは使っちゃいけないのは自分が一番わかってるだろ」

御坂「ごめん」

御坂妹「いえ。ですが私は嬉しくもあります。私達の代わりにお姉様がその白もやしに怒ってくれますから」

御坂「あんた・・・」

一方通行「おい。さっきからお前白もやしとか言ッてねエか？」

御坂妹「何言ってるんですか気のせいですよ」

一方通行「気のせいじゃねエんだよ。捻り潰すぞ」

御坂妹「それはそれは怖いですね」

八幡「お前等いつの間になんか仲良くなったんだよ」

一方通行「なッてねエよボケ」

御坂「わかったわ。ならあんたに任せるわ一方通行」

一方通行「・・・」

御坂「ただ、私あんたのこと一生許すつもりはないわ」

一方通行「賢明な判断だ」

八幡「さて話の続きをしますか」

こうして俺達は妹達の今後について話あった。俺達の戦いはこれからだ!!・・・ってなんでこんなジャ○プの打ち切り漫画みたいな終わり方してんだよ・・・

## 平穩

8月23日。あの嘘みたいな現実に起きたバトルから早2日。自分でも正直まだ実感がわかない。

一方通行と戦って勝った事についてだ。

今まで、いじめられっ子として中学生生活を送ってた頃の自分が見たらさぞ怪訝の顔を浮かべるだろう。

『そんな事はありえない。夢でも見てるんじゃないか?』と。

今の自分ですら感じるのだ。間違い無いだろう。

ただ、あれは間違いなく現実で起きたフィクション無しの実話なのだ。

あれからまだ2日だが俺の周りも平穩になった気がする。

22日に今後のプランなど全ての件にケリを付けた。

御坂美琴は元の居場所へと帰った。

色々友達に迷惑をかけたからしつかり謝つてくると少しやるせない顔を残しつつも満足気な顔でファミレスから出て行った。

御坂妹は1部は学園都市に残り、1部はちりじりに散って行った。

正直1万體近くの個体が残っているため、全てを一括管理と言う訳にもいかない。

冥土返しのついで海外の優秀な医者達に定期メンテナンスをして貰い、自我の構成を考えてるとの事。

話し合いに参加した10032号は…

『ミサカ達は別にこの街に未練なんかありません。むしろ恨んですらいる個体もいます。なので、この街から離れるのは全然問題ありません。』

と。いつもの無表情な顔で話していた。

『しようがないので、不本意ですがミサカは残ってあの白もやしに黙って守ってもらうとします』

などと、学園都市最強の男にこの扱いである。ただ、それはある意

味喜ばしいことなのかもしれない。

一度殺しあった中の一方通行とミサカ妹達。

お互いがお互いを被害者と呼ぶ姿には、なんとも言えない悲しさと同時に美しさを感じた。

お互いに命の重さを充分知っているから。

そして肝心の一方通行は、闇の中へ消えていった。

『俺が残った妹達に贖罪として守るなら、お前は光の側からオリジナルを守れ』

口調はあいも変わらず命令口調。ただ、その目は懇願する様にも見えた。

『俺の中では妹達もオリジナルも変わらねエ。守る範疇にいる。ただ、光側と闇側両方とも全部引つくるめて守れる程俺は強くねエ。だから光側はお前に任せる』

なんとも勝手な言い分だな。

『そうさせたのはテメエだろうが。それに一度忠告したのにも関わらず、首を突ツ込んだんだろうが。最後まで責任取りやがれ』

一方通行の中では、俺は全く無関係の人間だった。それがいきなり現れて自分と戦い勝利し実験を中止に追い込んだ。

だからこそお前にはその義務があると言う事らしい。

なんとも勝手だ。ただ、そう思いつつも素直に嬉しかった。

頼られたのだ。あの一方通行に。

友達なんかいた事はない。

だから少しむず痒かったが、これが友達なのかなと柄にもないことを思った。

だからこそ、これは自分の役目だと素直に受け取る事ができた。

その夜は今回の件を振り返りながら、帰路へと俺もついた。

23日の昼の13時頃

あの後帰ってから今までの時間を取り戻すかのように睡眠を貪った。割と時間を無駄にした感が否めないが・・・



「ふぁ・・・ようやくいつも通りの生活だ。」

夏休みはもう一步も外に出たく無いなどと引きこもり全開でいた矢先、普段ならない携帯電話から一通の着信が入る。

自分で言ってる悲しくなるな・・・

「絹旗からか・・・」

間違いなく今自分の顔を見られたら怒られるだろう。もの凄く出たく無い・・・

まあ、出ないと殺されるんで出ますけどね。

「はい」

「超遅いです!!3コール以内に出るのが常識でしょう!!」

「滅多に携帯がならないからな。携帯を見る習慣がほとんどねえんだよ」

「あ、すみません・・・」

やめて!絹旗さん!!そんな本気で申し訳なさそうにしないで!!

「いや、冗談だからね?そんなガチで落ち込むな」

鳴らないのは本当だけど・・・

「すみません。比企谷の事なのでマジだと思っていました」

謝る気あんのこいつ・・・

「んで?どうした?」

「はい!比企谷今日第7学区のファミレスに超来てください!!」

「は?なんで?」

「超祝勝会です!!やるって言ったじゃないですが!」

「ああ・・・言ってたなそんなこと」

「はい! 17時集合でお願いしますね!」

「いや、行くななんて一言も言っていないんだけど・・・」

「え?来ないんですか・・・?」

電話越しでも伝わる絹旗のシユンとした声。

年下の子にこう事言われるとお兄ちゃんスキル全開になってしま  
う。

「いや、わかった。17時な」

「はい!!超待ってます!!」

あからさまに態度が激変したのが伝わる。

そんなに祝勝会したかったのか。

さて、まで17時まで時間があるな・・・

「あ・・・」

色々バタバタしていて忘れていたが、俺そもそもエアコン欲しさに  
出かけていたのを忘れていた。

散々色んな奴らに邪魔されたからな。今日こそは買おう。

そう決意し、丁度第7学区に家電売り場のデパートがあることを思  
い出しながら外へと出た。